

磐越自動車道関係発掘調査報告書

おきのは
沖ノ羽遺跡 I (A 地区)

1994

新潟県教育委員会
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

磐越自動車道関係発掘調査報告書

おきのは
沖ノ羽遺跡 I (A 地区)

1994

新潟県教育委員会
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

太平洋側のいわき市と日本海側の新潟市を結ぶ磐越自動車道いわきー新潟線は、現在、完成に向けて着々と工事が進められております。全線が完成すると常磐・東北・北陸自動車道との連結が可能となり、地域社会の発展に大きく貢献するものと思われます。

新潟県教育委員会は、昭和59年以来磐越自動車道の建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりましたが、本書は、この道路の建設に伴って実施した「沖ノ羽遺跡」A地区の発掘調査の結果をまとめた報告書であります。

沖ノ羽遺跡は古墳時代・奈良時代・平安時代・中世にわたる遺跡で、A地区では平安時代の集落周辺の景観を想定できる遺構群が検出されております。この調査によって、従来余り明らかになっていなかった新津市域の沖積地に居を構えた人々の生活の一端をうかがい知ることができました。

この調査結果を地域の歴史を解明するための資料として、広く活用いただければ幸いであります。

最後に、本調査に多大な御協力と御援助を賜りました新潟市教育委員会をはじめ日本道路公团新潟建設局・日本道路公团新潟工事事務所には厚く御礼申し上げます。

平成6年3月

新潟県教育委員会

教育長 本間栄三郎

例　　言

1. 本書は新潟県新津市大字七日町字沖ノ羽3255他に所在する沖ノ羽遺跡の発掘調査報告書の第1冊である。発掘調査は磐越自動車道いわき～新潟線の建設に伴い、新潟県が日本道路公団から受託して実施したものである。
2. 本書は沖ノ羽遺跡の東部（A地区）の発掘調査報告書である。沖ノ羽遺跡は遺構の性格に応じて東より、A地区・B地区・C地区に大別し、調査面積が膨大であることから、まずA地区について報告することにした。
3. 発掘調査は新潟県教育委員会が調査主体となり、平成2年度から4年度にかけ実施した。なお、平成4年度の発掘調査については、新潟県教育委員会から委託を受けて財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団と略す）が調査を実施した。調査体制は第1章に記した。
4. 整理及び報告書作成にかかる作業は平成4年度に実施し、埋文事業団職員がこれにあたった。出土遺物及び調査にかかる資料は、すべて新潟県教育委員会が保管・管理している。遺物の註記は、略記号を「沖」として、出土地点・層位等を併記した。
5. 本書で示す方位はすべて真北である。磁北は真北から西偏約7度である。作成した図面のうち既成の図面を使用したものについては、それぞれその出典を記した。
6. 遺構と遺物の実測図は巻末の図版に一括した。出土遺物には通し番号を付し、挿図と写真図版の番号は一致させた。
7. 文中の註はすべて脚註とした。また、引用文献は著者及び発行年（西暦）を文中に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。
8. 本書の作成は、戸根与八郎（埋文事業団調査課調査第一係長）の指導のもとに、石川智紀（同専門員）が担当した。本書は、石川を中心に分担執筆したもので、高橋保雄（同主任）・亀井功（同）・佐藤正知（同）・木村康裕（同専門員）・星野信明（同）がこれにあたった。分担は、第I章1が亀井・石川、第I章2及び第II章1・2が佐藤、第II章3及び第IV章2が木村、第III章及び第IV章3が星野、第IV章1が高橋、第V章が石川、まとめが石川・星野である。なお、本書の編集は石川・星野が行った。
9. 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から貴重な御教示・御助言を賜った。厚く御礼申し上げる。（敬称略・五十音順）
伊藤秀和・岡本郁栄・川上貞雄・小川重蔵・金子正典・田村浩司・戸根富美江・新津土地改良区・真柄新平・横山勝栄・渡辺明和・渡辺ますみ

目 次

第 I 章	序 説	1
	1. 調査に至る経緯	1
	2. 調査体制と整理作業	2
第 II 章	遺跡の位置と環境	4
	1. 位置と地理的環境	4
	2. 沖ノ羽遺跡周辺の微地形	6
	3. 周辺の遺跡と歴史的環境	8
第 III 章	調査の概要	12
	1. 第一次調査	12
	2. 第二次調査	13
	A. 調査方法	13
	B. 調査経過	16
第 IV 章	遺 蹤	18
	1. 暇 序	18
	2. 概 観	20
	3. 遺構各説	21
第 V 章	遺 物	27
	1. 奈良・平安時代	27
	A. 須恵器	27
	B. 土師器	31
	2. 中 世	32
	3. 土 製 品	32

第 VI 章 ま と め	34
<要 約>	36
<引用・参考文献>	37

図 版 目 次

図 面

- 図版1 遺構実測図1(1:400) 3区・4区・6区
図版2 遺構実測図2(1:400) 1区・2区・6区
図版3 遺構実測図3(1:200) SD 38・39、SX 40
図版4 遺構実測図4(1:200) SD 16・24、SX 26・27、SD 29、SX 30
図版5 遺構断面図1(1:30)
図版6 遺構断面図2(1:30)
図版7 遺物実測図(土器1)
図版8 遺物実測図(土器2)
図版9 遺物実測図(土器3)
図版10 遺物実測図(土器4・土製品)

写 真

- 図版11 沖ノ羽道跡周辺空中写真
図版12 1. 調査前全景 2. 1区全景 3. 2区全景
図版13 1. 3区全景 2. 4区全景 3. 6区空中写真
図版14 遺構 1. 6区土層断面 2. SD 11・2・16 3. SD 16・20
図版15 遺構 1. SX 27 2. SX 26 3. SD 28・29
図版16 遺構 1. SD 38・39、SX 40 2. SX 30 3. SD 41・44・45
図版17 遺構 1. SD 2 土層断面 2. SD 2 3. SD 3 土層断面 4. SD 3
5. SD 6 土層断面 6. SD 6 7. SD 11 土層断面 8. SD 11
9. SD 12 土層断面 10. SD 12
図版18 遺構 1. SD 16 土層断面 2. SD 16 3. SD 24 土層断面 4. SD 24
5. SK 25 土層断面 6. SK 25 7. SD 22 8. SX 26 土層断面
9. SX 27 土層断面 10. SD 28・29 土層断面
図版19 遺構 1. SD 31 土層断面 2. SD 31 3. SX 30 土層断面 4. SD 32 土層断面
5. SD 32(6区) 6. SD 32(3区) 7. SD 33 土層断面 8. SD 33
9. SD 34 土層断面 10. SD 34
図版20 遺構 1. SK 37 土層断面 2. SK 37 3. SK 35 4. SD 36 5. SX 40 土層断面
6. SD 41 土層断面 7. SD 50 土層断面 8. SD 50
9. 3区土器(7)出土状況 10. 3区土器(8)出土状況

- 図版21 遺物（土器）
 図版22 遺物（土器）
 図版23 遺物（土器）
 図版24 遺物（土器・土製品）
 図版25 遺物（土器製作技法）

挿 図 目 次

第1図	沖ノ羽遺跡の位置	4
第2図	沖ノ羽遺跡周辺の地形	5
第3図	沖ノ羽遺跡周辺の旧地割	7
第4図	沖ノ羽遺跡周辺の主要遺跡（古代・中世）	9
第5図	沖ノ羽遺跡第一次調査試掘溝位置図	12
第6図	沖ノ羽遺跡グリッド設定図	14
第7図	沖ノ羽遺跡A地区土層柱状図	19
第8図	沖ノ羽遺跡遺構配置模式図	34・35

表 目 次

第1表	沖ノ羽遺跡発掘調査実施状況	17
第2表	沖ノ羽遺跡A地区遺物法量表	33

第Ⅰ章 序 説

1. 調査に至る経緯

磐越自動車道いわき～新潟線は、福島県いわき市を起点として常磐自動車道から分岐し、郡山市で東北縦貫自動車道に連結・交差する。さらには会津若松市、新潟県東蒲原郡津川町を経由し、新潟市に至って北陸自動車道と結ばれる。この総延長約212kmの高速道路は、太平洋側と日本海側を直結させ、産業・経済・文化の交流を促進させる重要な役割をもっている。

磐越自動車道のうち沖ノ羽遺跡にかかる区間(新潟～津川間)は、昭和53年12月に基本計画路線が決定され、昭和57年1月に整備計画に格上げされた。これより先、昭和56年12月には建設省北陸地方建設局により、新潟～津川間の路線概要・環境影響評価の説明が新潟県教育委員会(以下、県教委)及び関係6市町村に行われている。

昭和59年8月、日本道路公団新潟建設局(以下、公団)から県教委に、新潟～津川間の計画路線内及びその周辺の埋蔵文化財包蔵地の分布調査依頼がなされた。県教委は同年10月、分布調査を周知の遺跡の確認にとどめるが、平野部や段丘上には未周知の遺跡の存在する可能性があり、今後とも分布及び第一次調査を実施する必要性がある旨を回答した。

昭和60年2月、公団に新潟～津川間(約46km)の工事施工命令が出され、昭和61年8月には最終の路線発表を行った。県教委は新潟市～北蒲原郡安田町間の遺跡分布調査の依頼を受け、昭和62年4月、法線内の第1回遺跡分布調査を実施した。その結果、沖ノ羽遺跡を含めた計16ヶ所の第一次調査必要地点のあることとその調査面積を回答し、昭和63年1月に公団との間で新潟～安田間の埋蔵文化財発掘調査工程について打合せ会議を開催した。また同年2月、県教委は各地点の第一次調査の面積を回答した。昭和63年8月、県教委は「昭和63年度上半期発掘調査結果」の協議で、第2回分布調査の結果と今後の調査必要地点を示した。

平成元年1月の協議で沖ノ羽遺跡は調査発掘の対象地点とされ、平成2年1月、公団から沖ノ羽遺跡の第一次調査希望が提示され、同年4月の調査決定に基づいて、県教委は4月から6月末日までの間に計4回延30日間、沖ノ羽遺跡の第一次調査を実施した。

平成3年1月、「磐越自動車道埋蔵文化財調査工程会議」において沖ノ羽遺跡の第二次調査必要面積61,600m²を公団側へ示し、平成3年度・4年度に第二次調査を実施した。

2. 調査体制と整理作業

調査体制

発掘調査は新潟県教育委員会が主体となり、下記の体制で実施した。

【第一次調査 平成2年度】

調査期間 平成2年4月12日～13日・5月14日～24日・5月30日～6月2日・6月18日～30日

調査主体 新潟県教育委員会(教育長 堀川徹夫)

【第二次調査 平成3年度】

調査期間 平成3年4月15日～12月19日

調査主体 新潟県教育委員会(教育長 堀川徹夫)

管 理 総 括 大崎圭己(新潟県教育庁文化行政課長)

吉倉長幸(同 課長補佐)

庄 務 藤田守彦(同 主事)

調 査 調査指導 横山勝栄(同 埋蔵文化財第一係長)

本間信昭(同 埋蔵文化財第二係長)

調査担当 伊與部倫夫(同 文化財専門員)

調 査 員 龜井 功(同 文化財主事)

望月正樹(同 文化財主事)

澤田 敦(同 文化財専門員)

春日真実(同 嘱託)

上田順二(同 嘱託)

木村孝一(同 嘱託)

なお、平成3年度は全調査区(13区)のうち、1～4区、8区及び7区一部の調査にあたった。

【第二次調査 平成4年度】

調査期間 平成4年4月9日～12月10日

主 体 新潟県教育委員会(教育長 本間栄三郎)

調 査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団(理事長 本間栄三郎)

管 理 藍原直木(事務局長)

渡辺耕吉(総務課長)

茂田井信彦(調査課長)

調査指導 戸根与八郎(調査課第一係長)

調査担当 高橋保雄（調査課主任）
 調査員 亀井 功（同主任）
 佐藤正知（同主任）
 調査員 須藤高志（調査課専門員）
 木村康裕（同専門員）
 石川智紀（同専門員）
 星野信明（同専門員）
 塩路真澄（同嘱託）
 上田順二（同嘱託）
 佐藤 恒（同嘱託）
 底務 藤田守彦（総務課主事）

なお、平成4年度は5・6区、9～13区及び7区一部の調査にあたった。

整理作業

平成3年度には1～4区及び7・8区の発掘調査を実施したほか、調査の終了した12月下旬から3月中旬までの間、新潟県教育庁文化行政課曾和分室において、出土遺物の洗浄・註記及び造構カード・図面の整理等を行った。

平成4年度は、出土遺物の洗浄を調査現場で発掘調査と並行して実施した。調査の終了した12月中旬からは埋文事業団曾和分室において、平成4年度発掘分の出土遺物の註記及び造構カード・図面の整理に加え、本報告書に関わる1～4区、6区の本格的な整理を平成5年4月下旬まで行った。

「沖ノ羽遺跡」の発掘調査は全体を13区に分割し、平成3～4年度の2年間実施したが、今回報告するのはそのうちの東側にあたる1～4区、6区であり、「沖ノ羽遺跡A地区」と呼称することにした。これに基づき、5区、9～13区はB地区、7・8区はC地区と呼称することになった。

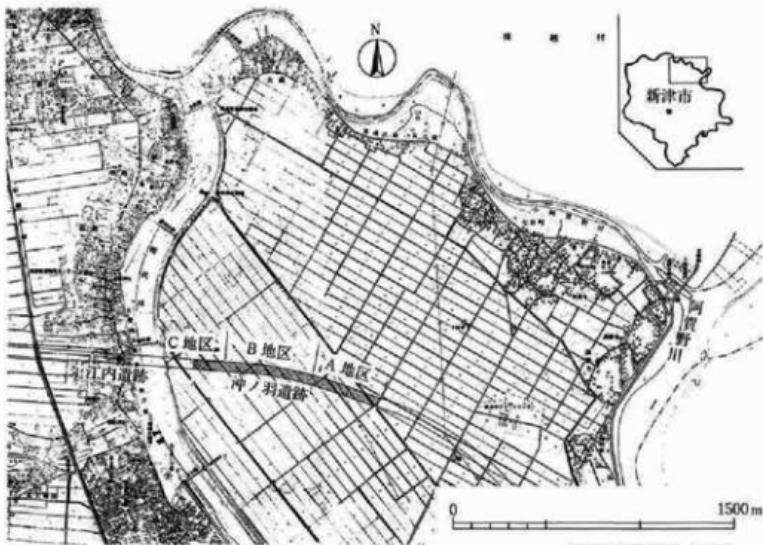
「沖ノ羽遺跡A地区」の遺物の復元・実測・写真撮影・図版作成等主要な作業は、石川を中心に高橋・佐藤・木村・星野・上田がこれにあたったが、この間に埋文事業団職員から多くの協力を得た。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1. 位置と地理的環境

沖ノ羽遺跡の所在する新津市は、新潟平野を東西に二分するように突出する第三系からなる新津丘陵を南端に、東は阿賀野川、西は信濃川、北は小阿賀野川に囲まれた地域に位置している。新津市の低地を含む新潟平野は、平野の出口を砂洲の形成でさえぎられて発達してきたいわゆる潟湖充填平野であり、信濃川・阿賀野川等の流入河川で運搬・堆積された土砂が被覆している(永田・神田ほか1973)。

この新潟平野には北東から南西方向に約80kmにわたって新潟砂丘が発達している。新潟平野の形成と深い関わりをもつこの砂丘は、その配列により内陸側から第I(亀田砂丘を含む)、第II(沼垂砂丘)、第III(秋義の新潟砂丘)砂丘列に大別できる。この砂丘列の存在によって新潟平野の海岸線の移動が明瞭にとらえることができ、埋没する遺物からI列は縄文前期以前、II列は古墳時代以前、III列は室町時代以前に形成されたものと推定されている(新潟古砂丘グループ1974)。なお、沖ノ羽遺跡はこの第I砂丘列の約5km南方に位置している。



第1図 沖ノ羽道路の位置

新津市作成(昭和62年作成及び修正)



第2図 沖ノ羽遺跡周辺の地形

新潟平野は以上のような砂丘地を除けば低平な湿地帯であり、いたるところに堆積の変遷を示す旧河道の氾濫原・蛇行跡・島畑・自然堤防等が見られる〔永田・神田ほか1973〕。この旧河川が作り出した蛇行跡や自然堤防がより明確に現れているのは、阿賀野川の流域であり、右岸では安田町・水原町南西部・京ヶ瀬村、左岸では阿賀浦橋付近から第2図の範囲外であるが五泉市にかけての地域である。この旧河道は、米軍撮影の1:40,000航空写真(昭和22年)からも容易に判読できる。

これらの旧河道の形成は、歴史時代以降と推定されている〔鈴木1974〕が、第2図にみられる水原町稗河原場から水ヶ曾根の旧流路は元文元年(1736)、横越村焼山のそれは大正2年(1913)に川の改修工事により形成されたもので新しい〔鈴木1989〕ものである。また、寛永16年(1639)「横越島絵図」(新潟市割野・青木氏所蔵)には、そえ潟・べら潟・なべ潟等現在見られない潟湖が多数存在しているが、近世後期の新田開拓や治水事業による水田の拡大、昭和に入ってからの土地改良・基盤整備事業によって、多くの潟湖は消滅し、現在のような美田が広がる景観に変貌した〔植村ほか1978〕。

微視的に見ると、阿賀野川・信濃川・小阿賀野川・新津丘陵に囲まれた沖積地には、1:50,000の地形図に表現不可能な起伏の小さな微高地や自然堤防が存在している。第2図からも明らかなように①新津市街地から西方の小合まで続くもの、②新津市街地から北西方向の長割・覚路津までは連続するもの、③能代川左岸で新津市街地から北上・川口・福島・田島へと続くもの、④結の東方から満願寺へと断続的に迫るもの等が認められる。これらはかつて阿賀野川が形成した自然堤防と考えられ、阿賀野川が西から東へ流路を変化させてきた結果と推測されている〔鈴木1989〕。なお、沖ノ羽遺跡は④の自然堤防上に位置している。

新津市の南端に位置する新津丘陵は、金比羅山(134m)の北部を境として、高度の不連続性から護摩堂山地と区分される。護摩堂山地を取り囲むように発達する新津丘陵は、標高100m以下のきわめて定高性のよい丘陵である。なお、新津の近代産業を代表する石油鉱場はこの丘陵の東側に集中している。また、新津丘陵・護摩堂山地縁辺には、かならずしも明瞭ではない台地が付随しており、縄文時代・弥生時代の遺跡が存在している。

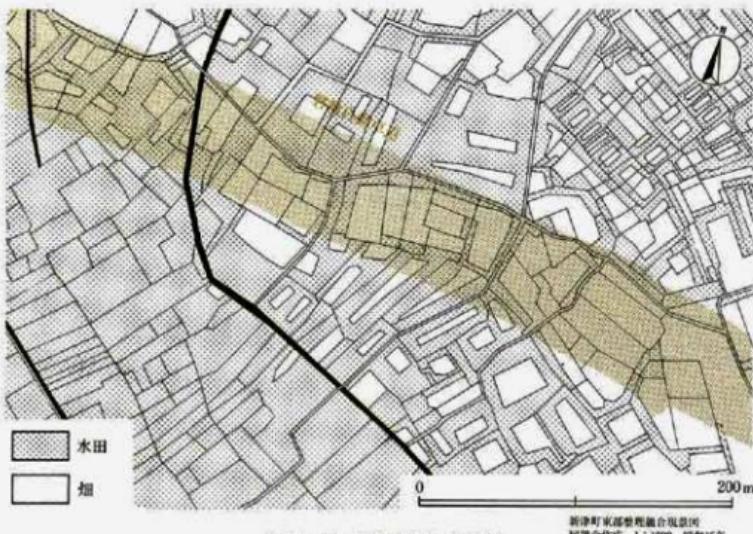
2. 沖ノ羽遺跡周辺の微地形

沖ノ羽遺跡は、能代川・阿賀野川・小阿賀野川に囲まれた沖積平野に立地し、付近の標高は4.0~5.8mを測る。現在は耕地整理が進み、地形の起伏がほとんど認められず一面の水田地帯である。この景観は、昭和15~25年に行われた土地改良事業によって形成されたものである。水田の中にわずかに残る畝は島状に分布しており、その比高は水田面より若干高く、50~80cmを測る。この比高差は、先述したように旧河川の作り出した自然堤防や微高地の一部が部分的

に残存したことにより、生じているものと考えられる。

土地改良以前の状況については、「新津市東部整理組合現景図」(第3図)及び明治44年(1911)の1:25,000地形図から知ることができる。特に、前者は昭和15年(1940)に新津町東部整理組合によって作成されたものであるが、当時の土地利用の様子が明確に把握できる。第3図が示すように、遺跡の南西方には方形に区画された水田が広がり、遺跡が立地している地域やその周縁には、畠地一枚一枚を取り囲むように作られている「堀田」と呼ばれる水田が分布する。現在と比べると畠地の分布の多いことが指摘できるが、そこでは桑が栽培され、五泉市の絹織物を支えていた地域の一つであった。

以上のような土地利用の状況から、土地改良以前の沖ノ羽遺跡周辺の土地には微高地が散在し、現在のような平坦な地形ではなかったと考えられる。すなわち、当時の土地利用は自然地形を生かして、平坦部は水田に、微高地は堀田と畠が混在するといった土地利用がなされたものと推察できる。以上のことから、沖ノ羽遺跡は、河川が形成した自然堤防・微高地上または、微高地の周縁部に立地していたものと理解される。



第3図 沖ノ羽遺跡周辺の旧地割

新津町東部整理組合現景図
同組合作成 1:3800 昭和15年

3. 周辺の遺跡と歴史的環境

新津市域の主な古代・中世遺跡の分布は第4図のとおりである。繩文・弥生時代については数例であるが、新津丘陵周縁部の台地に立地している。古墳時代の遺跡としては、古津八幡山古墳を始めとする古津地域に集中しており、弥生時代から奈良・平安時代にかけての連続性が推定される地域である〔木村宗1988〕。奈良・平安時代になると、遺跡の数も増え、丘陵周辺や沖積地上の微高地に立地している。近年、大規模開発や磐越自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査により、沖積地において広大な範囲を持つ遺跡の存在が明らかになってきている。また、生産遺跡は丘陵上にあり、七本松窯跡群などの須恵器窯跡は丘陵東側に、古津初越B遺跡などの製鉄遺跡は丘陵西側に分布している。中世の遺跡はさほど多く確認されていない。当地域と関係のあった平賀氏一族に関わる新津城・東島城・金津城等の城館跡が確認できる程度である。沖ノ羽遺跡周辺では、大字満願寺に長崎城があったという〔『温古の栄』34篇1893〕が、大正5年(1916)の阿賀野川改修工事で河中に没して遺構は確認できない。

古代の新津市域は、蒲原郡に属していた。現在の蒲原郡は北・中・西・東・南蒲原の5郡に分かれているが、古代における範囲は、およそ近代の中・西・南蒲原を含むものであったと考えられる。7世紀後半(690年頃)、蒲原郡は、頸城・古志・魚沼とともに越中国に属していた。なお、沼垂・磐船の2郡は越後国に属し、阿賀野川が両国の境となっていた。その後、8世紀初頭に越中国4郡の越後国併合(702年)、出羽国の分立(712年)により、後世の越後国の領域が定まったのである。これらは、渟足橋・磐舟橋設置とともに、大和政権の蝦夷政策の中で位置づけられる。近年、三条山古墳(三条市)・古津八幡山古墳など、古墳の発見が相次いでいるが、このことは、4・5世紀の段階で大和政権の影響が蒲原郡に及んでいたこと、三条市から新津市にかけての丘陵沿いに一定の政治勢力が存在していたことをうかがわせるものである〔甘船・荒木ほか1989、甘船・川村ほか1992〕。

10世紀に成立した『後名類聚抄』によれば、蒲原郡には「日置・桜井・勇礼・青海・小伏」の5郷が存在していた。また、延長5年(927)の『延喜式』神名帳には、「青海(2座)・京都良波志・伊久礼・楓田・小布施・伊加良志・伊夜比古・長瀬・中山・旦飯野・船江・土生田」の蒲原郡の式内社(12社13座)が記されている。これらの所在については、地名や遺跡の分布を手掛かりとして検討されているが、諸説一致をみていない。その中で、『大日本地名辞書』は日置郷を新津市あるいは村松町付近に比定している。式内社旦飯野神社については、新津市朝日の旦飯野神社・北蒲原郡笛神村の旦飯野神社の2説ある。しかし、北蒲原郡が古代において沼垂郡と考えられるから、笛神村説は成立し得ない。古津八幡山古墳や弥生時代の高地性集落などの歴史的環境を考慮すると、新津市周辺に日置郷・旦飯野神社の存在が考えられる〔木村宗



沖ノ羽跡周辺の主要道路（古代・中世）

1. 西南部道路	奈良・平安	16. 江内道路	中世	30. 大人道路	奈良・平安
2. 早瀬瀬道跡	平安・中世	17. 淀ノ瀬道路	古墳・奈良・平安・中世	31. 安曇野越道路	奈良・平安
3. 八幡瀬道跡	平安	18. 西沼瀬道路	平安	32. 木曾川日高道路	奈良・平安
4. 川原瀬道跡	平安・中世	19. 木曾川瀬道路	奈良・平安・中世	33. 木曾松原瀬跡	奈良・平安
5. 上野瀬道跡	平安	20. 沙美瀬道路	中世	34. 木曾谷空跡	奈良・平安
6. 上郷瀬道跡	奈良・平安	21. 川根瀬道路	奈良・平安	35. 木曾水空跡	奈良・平安
7. 上郷日高跡	奈良・平安	22. 下梅ノ木道跡	奈良・平安・中世	36. 西江浦道路	平安
8. 天王杉道路	平安	23. 中郷道路	平安	37. 少道上道路	奈良・平安・中世
9. 曽利瀬道跡	平安	24. 稲大門道路	平安	38. 織池道路	奈良・平安
10. 川原瀬道跡	平安・中世	25. 北岐瀬道路	奈良・平安	A. 佐長崎城	
11. 下笠原瀬道跡	平安・中世	26. 奈戸道路	古墳・奈良・平安・李朝	B. 阿波守城	(熊)
12. 長沼瀬跡	奈良・平安・中世	27. 大津瀬道路	奈良・平安	C. 佐馬城	
13. 結瀬道跡	奈良・平安	28. 丹波瀬道路	奈良・平安	D. 义見城	
14. 結瀬道跡	奈良・平安・中世	29. 古津八幡山古墳・八幡山道路	古墳・平安	E. 金津城	
15. 川口甲道路	奈良・平安・中世				

第4図 沖ノ羽跡周辺の主要遺跡（古代・中世）

国土地理院発行 1:50000
「新潟」「福津」平成元・2年

1988]。県内では、頭城地方が早くから開けていた地域であることが知られているが、遺跡の分布にみる歴史的環境や神位を有する神として『六国史』に見える頸城郡の居多神・大神神、蒲原郡の弥彦神の存在[山田1981]は、頭城郡とともに蒲原郡が他郡よりも政治・経済的に進んでいたことをうかがわせる。

古代末から中世にかけて、新津市域は金津保の保城であった。保城は、金津を中心に新津市から丘陵沿いに小須戸町・田上町を含んでいたと考えられる。保の成立は、越後の諸侯と同様に、11世紀後半から12世紀の院政期と考えられる。金津保の地頭職を最初に得たのは、信濃源氏平賀氏である。史料の初見は、『吾妻鏡』承久3年(1221)6月8日条に見える「金津(平賀)藏人資義」であるが、地頭職を得たのはそれ以前にさかのばる可能性がある。その後、資義の2人の子供にそれぞれ本津東方・新津西方が分割譲与された。鎌倉後期には、北条氏一門である越後守護名越時家が、幕府滅亡後の建武4年(1337)段階では、駿河・遠江守護今川氏の一族が地頭職を得ていた。『吾妻鏡』建仁元年(1202)3月4日条には「城四郎長茂并伴類新津四郎已下、於吉野奥被誅罪」という記事を載せる。城氏は、11世紀半ばから12世紀を通して阿賀野川以北の北越後に勢力を有していた。12世紀末の治承・寿永の内乱で平氏とともに滅亡するまで、越後最大の在地領主として、国衙から独立する存在であった。新津四郎について、詳細は不明であるが、平賀氏の一族と思われる。新津四郎が城長茂の伴類とされていることから、城氏の勢力が阿賀野川以南の金津保まで及んでいたことが考えられる。一方、時代は下がるが、応永18年(1411)8月19日の居多神社社領注文[『新潟県史』資料編4-2121、1983]に、金津保に含まれていたと思われる木津(横越村木津付近)・金沢西(新津市金沢付近)が国衙の在庁官人たちの所領(在庁名)として記されている。また、在庁名が金津保を北限として阿賀野川以北に及んでいなかったこともうかがえる。これらのこととは、阿賀野川に接する金津保が在地領主である城氏と国衙の在庁官人層との競合の地としての性格を有する所であったことが推測できる。

15世紀末から16世紀初めに作成された「蒲原郡段銭帳」は金津保を始めとする新津丘陵周辺の所領状況をうかがうことができる史料である[『新潟県史』資料編中世補遺-4450、1986]。これによれば、金津保は約328町もの広大な田地を有し、平賀氏や平賀氏から分出したと思われる新津・木津氏が領有していた。しかし、その大半は、守護上杉氏直臣の長尾・飯沼氏等の所領や守護の御料所であった。鎌倉期以来、金津保を領有していたのは平賀氏一族であったが、鎌倉・室町を通して守護勢力の圧迫を受け、決して安定した領有ではなかったようである。この間、14世紀半ばの南北朝の内乱、15世紀前半の応永の大乱、16世紀初頭の永正の乱など、蒲原郡を中心に戦いが展開している。特に、南北朝の内乱では、新津市域でも戦いが行われていたことがわかる。その後、平賀・新津氏を始めとする一族は戦国大名上杉氏の家臣としての道を歩む。

新津市域の地名を見ていくと、「古津」・「新津」という「津」(港の意味)の付された地名が

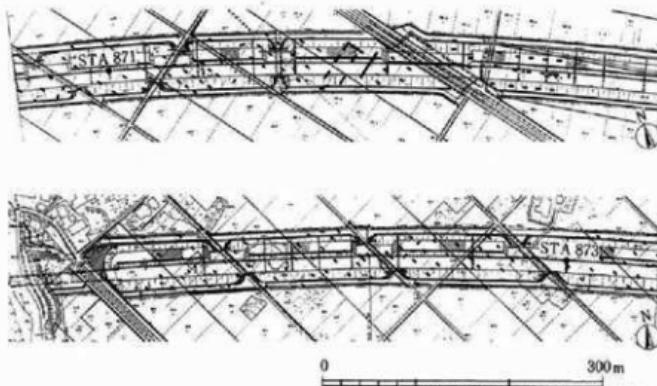
あることに注目できる。これらの地名は12世紀までさかのほることができる。当地域は、地理的に、信濃川・阿賀野川の河口付近にあったとされる蒲原津と両河川で結ばれていた。蒲原津は『延喜式』において園津的な性格をもって記されており、当初の越後国府の系譜を引くものであったとも推定されている。また、蒲原郡きっての交通の要衝であり、中世においては、蒲原津を押さえることが、蒲原郡を中心とした戦いでは重要であったようである。両河川に囲まれた当地域は、蒲原郡さらには沼垂郡の河川交通の要衝として位置づけられよう。

沖ノ羽遺跡の所在する大字七日町はすでに中世において商業集落であり、近世に農村化した集落である[小村1983]が、その他の集落の開発は慶長・元和期といわれている[『中蒲原郡誌』]。当地域の集落の開発は近世初期にさかのほり、これ以降、現在の景観が形成されたと考えられる。おそらく、古代・中世の新潟平野は潟湖や湿地など未開拓地が広大に存在し、河川と潟湖の世界ともいべき景観を呈していた[田村1988]。新津市域の古代・中世遺跡の分布をみると、生産遺跡(製鉄遺跡・須恵器窯跡)は丘陵上にあるが、集落遺跡は丘陵裾、沖積地上の微高地に拡大していることがわかる。このことは、「大開墾時代」といわれる平安時代後半から鎌倉時代初期の開発との関わりを想起させる。多様な開発について明らかにされているが、文献史料より指摘される旧道路・氾濫原に生じた微高地(「島」)・自然堤防上の開発[木村茂1982]に相当するものととらえられよう。従来、信濃川・阿賀野川に囲まれた沖積地における人々の生活の状況は不明確な点が多く、信濃川沿いの白根市庄瀬地内の低湿地帯から鎌倉時代の村落跡が発見された例がある程度である[川上1983]。沖ノ羽遺跡を含めた沖積地の遺跡の調査は、河川と潟湖の世界の微高地に居住した人々の生活を考える上で多くの示唆を与えてくれるであろう。

第III章 調査の概要

1. 第一次調査

第一次調査は、県教育委員会により平成2年4月12日～13日・5月14日～24日・5月30日～6月2日・6月18日～30日の4回行われた。調査方法は、対象地域全体に任意にトレント(試掘溝)を設定し、遺構・遺物の有無を確認するというものであった。トレントの数は190基(2,048m²)で、調査範囲面積73,020m²に占める割合は約3%であった。結果、STA(センター枕)867付近からSTA 870+80付近、及びSTA 872+20付近からSTA 877+30付近の範囲に遺物包含層が認められた。また西側(7・8区に相当)には遺物包含層が2枚存在した。遺構として、溝・土坑・ピットなどが検出されたが、特に東側(2区西側・6区東側に相当)には柱跡状遺構が集中して検出され、水田遺構が存在すると推定された。加えて、遺物包含層の2枚ある範囲の一部(8区北側に相当)には、土器類及び遺物の出土状況から、住居跡の存在する可能性もあった。出土遺物は大半が土器類・須恵器であり、1点のみ近世陶磁器が存在した。土器類は甕・鍋など、須恵器は甕・杯・杯蓋などで、共に9～10世紀に属するものであった。この調査結果により、遺物包含層の確認された範囲に次年度第二次調査を実施する必要が生じた。また対象地域の西側の一部(STA 877+30付近からSTA 878+20付近)には耕作中の畠地等が存在しており、後日試掘調査を実施し、その取扱いについて協議する必要が生じた。



第5図 沖ノ羽遺跡第一次調査試掘溝位置図
日本道路公团海港建設局 前川工事事務所作成
1:500 昭和60年5月

2. 第二次調査

A. 調査方法

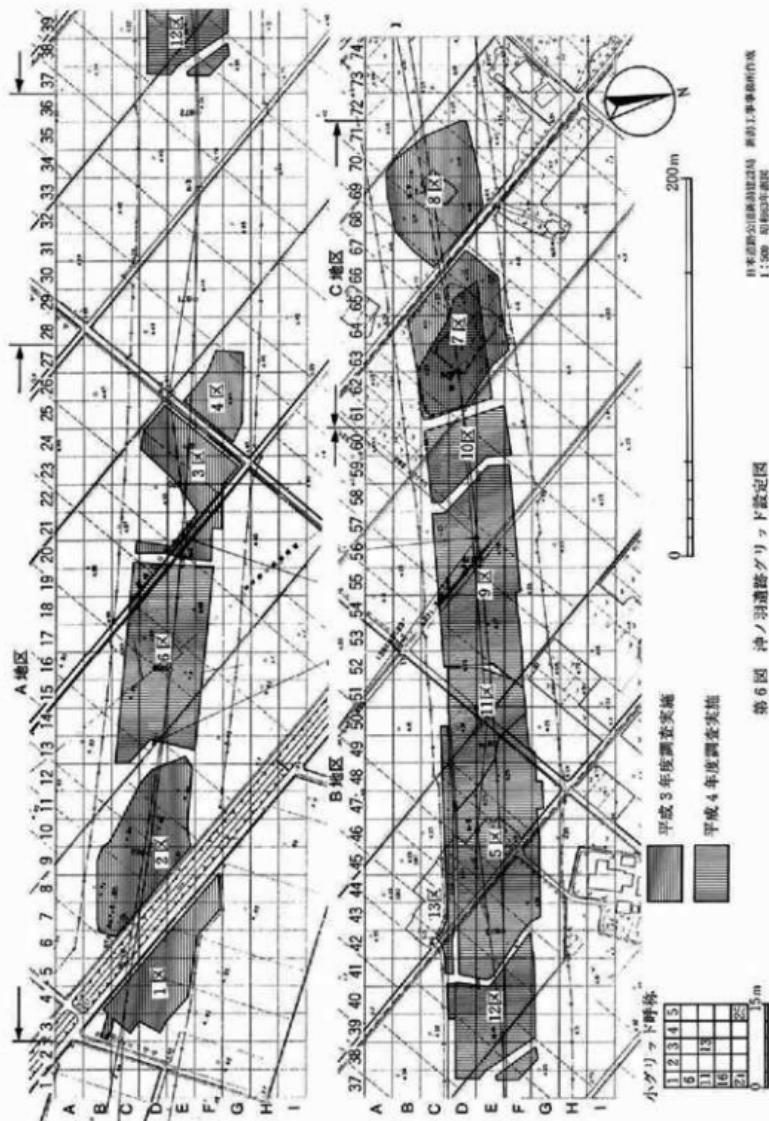
(1) 調査地の範囲と現況

沖ノ羽遺跡 A 地区は高速道法線に沿った東西長さ約370m・南北幅40~50mの範囲である。調査区割りの番号は、調査範囲全体の通し番号とした。カルバート-ボックス工事など公團側の工事が優先される区域から先に調査に入り、基本的にはその順番を区の番号とした。全体を13区に分けたが、A 地区は東西に長く伸びる沖ノ羽遺跡の東側にあたり、東側から1区・2区・6区・3区・4区が位置する。1区と2区は農業用水路により、2区と6区は工事用道路と工事に伴い作られた仮設農業用水路により、3区と4区は市道七日町38号線により分けられる。また3区と6区を分けていた調査用プレハブ・仮設農道は、後に3区に含めて調査した。

A 地区の調査前の状況は水田であった。標高4.5~4.9mとほぼ平坦だが、北東側から南西側に向かって多少の起伏をもってわずかに傾斜しており、東西で約40cm・南北で10cm以内の高低差があった。ただし6区南側の17C・Dを中心とした場所のみ、約20cmの高まりを示した。また16・17Eにかけ、東北電力西新潟線の鉄塔が立っていたため、基礎部分の範囲が搅乱を受けていた。

(2) グリッドの設定(第6図)

グリッドは調査範囲全体に共通したものである。グリッドは大・小の2種あり、大グリッドは15m四方を単位とし、小グリッドは大グリッドを3m四方に25等分したものである。大グリッドの方向と区割りは、センター杭を基準にした。STA 871(X=201,670.2251, Y=55,802.8850)とSTA 873(X=201,711.6923, Y=55,807.2689)を結んだ線を横軸とした。横軸は真西より11度58分07秒北偏しているものの、ほぼ東西を示すといえよう。横軸は南から順にアルファベットを付した。STA 873を中心に横軸と直交する線を縦軸とした。これはほぼ南北を示し、東から順に算用数字を付した。両者の交点に杭を打ち、「1A」などと組み合わせて呼称した。大グリッドは南東側の杭番号優位で呼称した。小グリッドは、1~25の算用数字を「1A 25」などと大グリッド表示の後に付けて呼称した。小グリッドの番号の呼称法は大グリッドに準じさせた。大グリッド及び調査区端のグリッド境界への杭打ちは業者に依頼して行った。



第6図 沖ノ羽道路グリッド設定期

(3) 調査方法

第二次調査は、表土・包含層を重機を用いて削平することから始めた。基本層序を確認し、遺跡の基本的状況を把握したのち、遺構検査を行った。遺構の検出・発掘により遺跡の全容を確認したのち、遺構の実測・写真撮影などで記録を残し、調査を完了した。

排水 調査区は沖積地である上、周囲に水田・農業用水路などがあることから、調査区内の排水が不可欠であった。公团側に依頼して調査前に各地区の周囲を巡る暗渠を設置し、集水枡からポンプを使い24時間排水を行った。これ以外にも、調査の際に必要な場所に排水溝を掘り、暗渠や集水枡に水を流した。

包含層削平 セクションベルト(畔)を土層観察のため調査区内を横断するよう残し、表土及び人力による発掘が不要と判断された遺物包含層の一部は、すべてバックホーで掘った。堆土はダンプカーで調査区外に搬出した。なお、覆土らしい土や多くの出土遺物など、遺構を示すと考えられる要素が検出された場合、その場所の包含層を残して、人力による削平に切り替えた。包含層出土の遺物は小グリッドごとに取りあげた。

層序確認 前述のセクションベルトに加えて、排水溝の断面・調査区の周囲を巡る壁面などを精査し、土層観察に利用した。層序を決定したのち、セクションベルトの一部または全部を縮尺1/20で実測した。一部のみ実測する場合には、任意に数ヶ所を選び幅1mずつ実測した。

遺構精査 包含層削平が終了したのち、遺構の平面的な広がりを検出するために精査を行った。

遺構発掘と実測 遺構発掘は、セクションベルトを残して掘るか、半截した後、土層観察・写真撮影・縮尺1/20の土層断面図作成等を行い完掘した。遺構の平面実測は縮尺1/20の簡易遠方で行った。また調査と平行して調査区の縮尺1/100略図を作成し、現場で利用し調査に役立てた。遺構番号は遺構の種類にかかわらず、調査当時は調査区分・検出順に通し番号を付けた。種別ごとの記号は、掘立柱建物=SB・溝=SD・井戸=SE・土坑=SK・ピット=P・性格不明遺構=SXである。なお、整理にあたって、遺構番号は東側から順番に、A地区全体の通し番号に付け替えた。

写真 フィルムはカラーと白黒の2種類を使用し、どちらもベタ焼きをしてネガと共にアルバムに保存した。現場ではカラーフィルムのみメモ用写真として遺構カードに貼付するため現像し、メモ用写真のみ撮影する場合には白黒フィルムは使用しなかった。平成4年度の調査では、一部の調査区の全体写真撮影(A地区では6区)を業者に依頼して、ラジコンヘリコプターを使用して行った。

掘り残し確認 全調査が終了した後、バックホーで調査区の全域または一部を削平し、掘り残した遺構の有無を確認した。遺構を検出した際は、発掘・実測と写真撮影を行い記録に加えた。

B. 調査経過

(1) 平成3年度

平成3年4月15日～12月19日まで調査を行った。当年度の調査予定地区を8調査区に分割し、1・2区、3・4区、5・6区、7・8区上層の順に調査に入る予定であった。しかし公団との協議の結果、調査順序を変更し、7・8区を優先して公団に引き渡すため、3・4区と7・8区(次年度調査予定であった下層も含む)を並行して調査することになった。しかし天候不順と、7・8区から予想以上の遺構・遺物が検出されたことにより、調査途中の7区下層を残し当年度作業を終了させ、撤収せざるを得なかった。7区下層の残りと5・6区は次年度の調査に回すことになった。

1区(4月16日～7月4日)

重機による表土の削平を1・2区同時に4月16日から開始した。5月13日から岡区に作業員を入れ本格的な調査に入った。当初、南側から畦畔及び水田状遺構が検出されたが、土層確認により近世以降のものと判断しこれを放棄した。直線的な溝しか検出されなかつたが、溝同士の相対的な重複関係では、東西溝(SD 3・5・14)は南北溝(SD 6・11・18)より古く、同一方位の溝は同時期の可能性も考えられた。またSD 2の形状をより明確に把握するため東側に調査区を拡張したが、その際SD 2と平行関係にある溝(SD 1)を検出した。7月4日に調査を完了した。

2区(4月16日～6月27日)

前述のように1区と並行して調査に入り、1区と同様の直線的な溝を中央から東側にかけて多く検出した。2区全体を横断する東西溝(SD 2・16)を最大の遺構として、細い溝がこれに対し平行・直交し、区画らしきものを形成していた。しかし畦畔など水田遺構を明示するものは検出できなかつた。また、いずれの溝も重複関係を確認出来なかつた点は1区と異なる。6月25日までに実測を終え、27日の写真撮影で全調査を完了した。

3区(6月11日～8月26日、10月7日～11月8日)

6月11日から4区と並行して重機による表土削平を行い、6月24日から西側より調査を開始した。主な遺構として、北西から南東に延びる溝(SD 32)・重複する2条の溝(SK 40)を検出した。8月末までの時点で南東側は溝の続きしかないことが予想されたため調査を取り止め、プレハブ・仮設農道が不要になる10月まで調査を中断した。これらの移転・付け換え後の10月より表土の削平・調査を行った。結果、SD 32の続きとこれと平行関係にある溝と土坑(SK 35・SD 36)などを検出した。SK 35からは比較的多くの遺物が出土した。

4区(6月11日～8月29日)

前述のように3区と並行して調査を進めた。東側に、北西から南東方向に直線に延びるピット群を検出した。半截した結果、掘り形・柱根などは見いだせず柱穴ではないと判断した。そ

の他の連携は数条の直説的な添のみであり、隣接する3区との関連も認められなかった。

(2) 平成4年度

平成4年4月9日～12月10日まで調査を行った。昨年度の5・6区を合わせて5区とし、2区と3区の間に6区と改めた。他の調査区は、調査に入った順に9～13区の名称をつけた。

6区(7月20日~10月1日)

7月20日から重機による表土削平を行い、8月6日より調査に入った。全体的に出土遺物は少なく、特に南西側はIV層のレベルが他よりも低く遺構・遺物ともにほとんど検出されなかつた。これに対し東側では多くの溝が東西・南北方向に延びて重複しており、数本の溝の集中する15Dグリッドからは比較的多くの遺物が出土した。工事の関係上、13・14Dグリッドの一部と13・14Cグリッド以外の調査区全景を9月18日に航空写真を撮影し、先に公團に引き渡した。残りの調査は9月21日～24日の間行い、平面形U字状の溝を検出した。ところが溝に埋まれた部分にも掘り込み・覆土が確認されたため、性格不明遺構(SX 26)とした。東側の重複関係にある溝の一部も性格不明遺構(SX 27・30)と推定した。29日に実測を終え、10月1日の写真撮影で全調査を完了した。

第1表 沖ノ羽遺跡発掘調査実施状況

第 IV 章 遺 跡

1. 層 序

沖ノ羽遺跡全体の調査区は長さ約1,050m・幅約40~50mの広範囲に及び、標高4.0~5.8mを測る。現地形は耕地整理等の改変によりほぼ平坦であるものの、全体的に見ると西側に比べ東側がわずかに高い。その中で畑地として残された部分は島状(島畑)に高くなっている。旧地形は耕地整理前の土地更正図によれば、現在より畑地部分が多く、微高地及びその周縁部であったと推定される。基本層序は調査区の広さ、土地改良、旧地形の様子等によりそれぞれの地点で、層序・土質・色調等に若干の違いがあるものの、ほぼ旧地形の傾きに沿って堆積し、基本的にはI~V層に区分される。初めに調査区全体の層序について概観し、ついでA地区の層序について述べる。なお、III層については細分しアルファベットを付した。また、各地区的層序の説明で必要に応じさらに細分したものについては、同様にアルファベットを付した。以下、各層について説明する。

I層 昭和15年以降に始まった耕地整理から現在までの堆積である。褐色~灰褐色シルトを基本とするものの、畑地と水田では性状が異なる。畑地では褐色を呈し、粘性・しまりにやや欠ける。水田では灰褐色を呈し粘性・しまりがややある。また、下層には酸化鉄・酸化マンガンの沈着が認められる。

II層 灰褐色~褐色シルトを基本とし、旧耕作土から中世までの堆積と推定される。色調・土質から何層かに分層できるが、耕地整理時の削平が著しいため完全に遺存している部分が少なく、分層された各地区的層の整合性は明確でない。II層中の下半に中世の遺物確認面があり、遺物包含層はこれより上層と推定されるが不明であった。

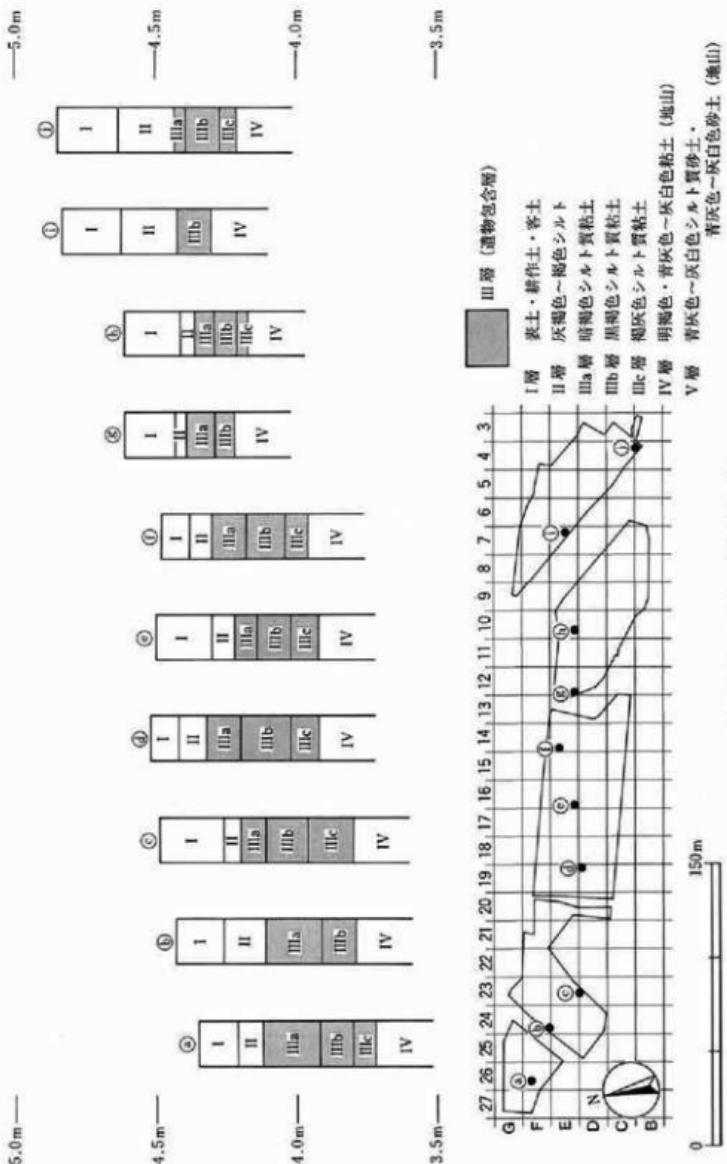
III層 平安時代・古墳時代の遺物が含まれる層である。耕地整理時の一部の削平部分を除き、ほぼ調査区全体に認められる。特にIIIb層は他の層と明瞭に識別でき、本遺跡の健層となっている。III層は色調・含有物等から3層に分層される。

IIIa層 暗褐色シルト質粘土を基本とする。

IIIb層 黒褐色シルト質粘土を基本とし、酸化マンガン結核が認められる。

IIIc層 暗褐色シルト質粘土を基本とし、酸化鉄・酸化マンガン結核が認められる。

平安時代の遺物は、IIIb層に多く含まれ、IIIa層・IIIc層は少ない。古墳時代の遺物は、IIIc層に多く、IIIb層に少なく、IIIa層には含まれない。平安時代の遺物は出土量の多少はあるも



第7図 沖ノ羽道路A地区土層柱状図

の、ほぼすべての調査区で認められる。

IV 層 明褐色・青灰色～灰白色粘土を基本とする地山である。¹⁾ 酸化鉄の酸化状態により部分的に色調が異なるが土質は同じ。おおむね明褐色粘土は上層に、青灰色～灰白色粘土は下層に堆積する。

V 層 青灰色～灰白色シルト質砂土・青灰色～灰白色砂土を基本とする地山である。土性の違いにより二分されるが、青灰色～灰白色シルト質砂土が上層に、青灰色～灰白色砂土は下層に堆積する。

A 地区の現地形は東側が西側に比べわずかに高く、比高差は約40cmを測る。耕地整理前の土地更正図によれば、A 地区は島畑と水田が混在し、北側は畠地が多く、南側は水田が多くなる。したがって、A 地区の北側にあった微高地の南縁部と推定される。層序は前述の層序とほぼ同様であるものの、A 地区では古墳時代の遺構・遺物が検出されず、この点で他地区と異なる。I 層約20cm、II 層約20cm、III 層約20～40cmを測り、地表面より約40～70cmで地山面に達する。

2. 概 観

A 地区の主体は平安時代であり、古墳時代から奈良時代・平安時代・中世にわたる B・C 地区とは状況が異なる。また、検出された遺構も、掘立柱建物・井戸が検出された B・C 地区と異なり、溝・土坑のほか性格不明の遺構があるが、大半は溝である。

溝は42条検出された。規模・形状など様々なものがあり、それぞれ異なる性格をもつものと考えられる。たとえば、後述する性格不明遺構には、その長軸と同一方向の溝が接しており、何らかの関連した機能を有していたものと考えられる。SX 26に対する SD 24がそれにあたる。同様なものに SX 27・30・40に対する SD 28・16・38がある。その他、SD 5・6・19・21などは土地を区画するものとも考えられる。また、新旧の不明なものが多いが、すべてが同時期に存在したものではなく、多少の時期差があると考えられる。総じて遺構出土の遺物は少ないが、6 区 SD 29(15 D 25グリット F)では比較的集中している。なお、SD 2・11・16・32は、各区の間の調査が行われていないため、確認はできないが、連続すると考えられる。

土坑は3基検出された。SK 25は SD 24と、SK 35と SD 36は接するが、この二組の土坑と溝はそれぞれほぼ同一の覆土をもっており、何らかの関連があると思われる。遺物は3区 SK 35に比較的集中している。

1) B 地区 IV 層中から少量出土する古墳時代の遺物について、遺構は不明確であったが遺構に伴う遺物とする意見、包含層の遺物とする意見などがあり、一致を見ていません。古墳時代の遺物の出土する地区は未整備のため、本報告では前述のように記述したが、今後遺物の出土状況・分布などの検討により、IV 層の設定について変更もあり得る。

性格不明の遺構は、5基検出された。4基は形状が多少異なるが、同様の性格をもつものと考えられる。残りの1基(SX 42)は溝の一部の可能性がある。4基のうち3基は6区南東に集中し、1基は3区にある。いずれも、深さ5~15cm・幅100cm以下の溝で囲まれている。SX 30は掘り込みが浅いために南西側の確認はできず、SX 26・27・40も調査区外へのびるため、その全容を明らかにすることはできなかった。しかし、SX 27に見られるように隅丸の長方形を呈していたことが推定される。また、それぞれ、SD 16・24・28・38と関連しながら機能していたことが考えられる。溝に囲まれた部分の遺存状態は良好とはいせず、SX 26の北側で多少の掘り込みを確認できる程度である。遺物はSX 27の15D 18・19・23・24グリッドに比較的集中しているが、SX 27に接するSD 29(15D 25グリッド)の遺物と関連があると思われる。これらの遺構の性格について詳細は不明と言わざるをえないが、溝に囲まれた部分に多少ながら掘り込みが存在することは、単に溝を廻らただけではないという点で注目される。

3. 遺構各説

SD 1・13・20(図版2・5・14)

SD 1は1区、SD 13・20は2区にある溝で、方位はN-70°~85°-Wである。いずれもSD 2・16の南側に位置し、SD 2・16とは30~110cmの間隔ではほぼ平行する。いずれも幅30~50cm・深さ5~10cmの範囲内である。位置・形状などの共通点から何らかの関連が考えられる。SD 13・20は断面形皿状であるが、SD 1の立ち上がりはやや急角度である。SD 20は一部途切れのびている。SD 20の覆土はIV層に近似した土を多く含む暗褐色シルトである。SD 20から土師器片のみ出土している。

SD 2・16(図版2・4・5・14・17・18)

SD 2は1区~2区8Cグリッドまで方位N-75°~80°-Wにのびる溝で、8Cグリッドで直角に曲がり、南側へN-30°-Eにのびる。SD 16は8CグリッドでSD 2と分かれてN-60°~70°-Wにのびるが、SD 2との重複関係は不明である。いずれも底面は西側に(SD 2の南部分は南側に)傾斜し、幅100~150cmであるが、SD 16は深さ10~20cmの断面形皿状であるのに対し、SD 2は深さ15~30cmの断面形U字状と深く掘り込まれている。いずれも側壁に部分的にテラス状の段をもつ。またSD 16は6区でSD 24・29、SX 27と重複しSX 30に接するが、その際、方位N-70°-Eに変化する。これらとの重複関係も不明である。覆土は酸化鉄を含む黒褐色粘土で下層にはIV層に近似した土がブロック状に混入する。SD 2から土師器片、SD 16から須恵器杯(26)などが出土している。

SD 3・5・6(図版2・5・17)

1区南側にある溝で、SD 3は一部途切れながら方位N-85°-Wにのび、N-80°-WのSD

5とほぼ平行し、いずれもN-30°-EのSD 6に切られる。SD 3・5はSD 2とも平行し共に12~15m間隔を保つ。SD 3・5は幅30~60cm・深さ5~10cmの範囲内で、断面形皿状で西側に底面が傾斜するのに対し、SD 6は幅50~70cm・深さ5~20cmとやや大きく、断面形皿状だが、立ち上がりはやや急角度である。底面に凹凸がある。SD 3の上層は黒褐色、下層はIV層に近似した土がブロック状に混入する褐色のシルトである。SD 5は暗灰色粘土、SD 6は暗褐色粘土質シルトで下層にIV層に近似した土が混入する。SD 3から須恵器片、SD 6から土師器片・須恵器杯(10)などが出土している。

SD 4・9(図版2・5)

1区にある溝で、方位はそれぞれN-50°-E・N-60°-Eとほぼ平行する。幅40~60cm・深さ5~15cmの範囲内にある。いずれも断面形皿状で底面は西側に傾斜するものの、SD 4の立ち上がりはやや急角度である。覆土は、SD 4が暗灰色粘土、SD 9が上層は暗褐色粘土質シルト、下層は灰褐色シルト質粘土である。SD 4から土師器片・須恵器片が出土している。

SD 7・8(図版2・5)

1区北側にある溝で、重複関係は不明である。SD 7は一部途切れながらN-67°-Wに、SD 8はN-50°-Wにのびる。SD 7は幅30~50cm・深さ5~10cmで、底面は東側に傾斜する。SD 8は幅90~100cm・深さ約7cmで、底面に凹凸がある。いずれも断面形皿状であるものの、SD 7の立ち上がりはやや急角度である。SD 8の覆土は、上層が灰色粘土質シルト・下層がIV層に近似した灰白色シルト質粘土である。SD 7・8いずれも土師器片が出土している。

SD 10(図版2・5)

2区南側にある溝で、方位N-55°-Wである。幅50~70cm・深さ約18cmで、断面形皿状である。覆土は黒色粘土で、下層にIV層に近似した土が混入する。土師器片が出土している。

SD 15(図版2)

2区南側にある溝で、N-25°-EでSD 2南部分とほぼ平行する。幅70~90cm・深さ10cmである。断面形皿状で、底面は北側に傾斜する。須恵器片が出土している。

SD 11・12(図版2・5・14・17)

SD 11は1区~2区を方位N-30°-Eにのびる溝である。SD 12は1区をN-80°-Wにのび、SD 11とほぼ直交するが重複関係は不明である。SD 11はSD 6と、SD 12はSD 3・5とほぼ平行する。SD 12は幅80~120cm・深さ10~20mの断面形皿状である。これに対しSD 11は幅110~180cm・深さ20~30cmの断面形U字状と大きく掘り込まれ、側壁に部分的にテラス状の段をもつ。覆土は共に粘土質シルトで、上層が暗褐色、下層が黒褐色である。全体にIV層に近似した土がブロック状に混入する。底面は、SD 11が南側、SD 12が東側に傾斜する。SD 11から須恵器片、SD 12から土師器片が出土している。

SD 14(図版2・5)

1区にある溝で8Fグリッドで二叉に分かれる。方位N-65°-Wで、分かれた部分はN-60°-Eである。SD 11・12・18に重複するが切られている。幅40~60cm・深さ5~15cmの断面形皿状で、IV層に近似した土を含む暗褐色粘土質シルトが入る。須恵器片・土師器片が出土している。

SD 17・19・21(図版2・5)

2区中央にある溝で、SD 19はSD 17・21と直交するが重複関係は不明である。SD 19は一部途切れながら方位N-15°-20°-Eに、SD 17はN-80°-Wに、SD 21はN-70°-Wにのびる。いずれも幅30~60cm・深さ5~15cmの範囲内にある断面形皿状で、SD 17の底面は東側に傾斜する。覆土はSD 17・21が暗褐色、SD 19が黒褐色の粘土で、いずれも下層にはIV層に近似した土が混入する。出土遺物はSD 19の土師器片のみである。

SD 18(図版2)

1区9Gグリッドにある溝で、方位N-15°-Eである。幅30cm・深さ10cmの断面形皿状で、覆土は暗褐色粘土質シルトである。

SD 22・23(図版2・5・18)

SD 22は2区中央にある溝で、方位N-50°-Eにのびる。SD 16・20・23との重複関係は不明である。SD 23はN-75°-Wである。いずれも断面形皿状で、幅30~60cm・深さ5~10cmの範囲内にある。SD 22の底面は南側、SD 23は西側に傾斜する。SD 22の覆土は、上層が黒褐色、下層がIV層に近似した土が混入する暗褐色粘土である。SD 22・23からはいずれも土師器片が出土している。

SD 24・SK 25(図版2・4・5・18)

SD 24は6区東側にある溝で、方位N-15°-EからN-5°-Wに湾曲してのび、SD 29・33と平行する。また、SD 16と直交するが、その部分が途切れているため重複関係は不明である。幅50~60cm・深さ10~15cmの断面形皿状である。SK 25はSD 24南端に接する土坑で、重複関係は不明である。直径60cm・深さ20cmの断面形皿状を呈する。いずれも酸化鉄を含む暗灰色粘土を覆土とする。SD 24から土師器片が出土している。

SX 26・27・30(図版1・2・4・15・16・18・19)

6区東側にある、溝及びそれに囲まれた部分で形成される隅丸長方形の遺構である。SX 26・27の南側は調査区外にのび、SX 30は西側を検出できず、いずれの全容も不明である。またSX 26・27の重複関係も不明である。検出された規模に限れば、長方形の長軸はSX 26が11m・SX 27が24m・SX 30が15mで、いずれの短軸も5~6m・溝の幅40~100cm・深さ5~15cmの範囲内にある。長軸の方位は、SX 26がN-20°-E・SX 27がN-15°-W・SX 30がN-80°-Eである。SX 26とSX 27はほぼ並列しており、SX 27とSX 30の長軸方位はほぼ直交する。3基とも

北辺に SD が隣接ないしは重複しているが、SX の長軸と SD の方位はほぼ同一である。また SX 溝部分の底面のレベルは、SD の底面より低い。その他、SX の特徴として、圓まれた部分の一部に掘り込みが検出されることが挙げられる。特に SX 26北側は顕著で、深さ 5~10cm の掘り込みが広がる。いずれも溝部分は断面形皿状で、SX 27は一部途切れている。覆土は、いずれも鉄分を含む暗灰色の、SX 26・27は粘土、SX 30はシルト質粘土である。SX 27から比較的多く土師器片・須恵器片などが出土し、特に SD 28と接する部分(15 D 18・19・23・24グリッド)に集中している。その他 SX 26から須恵器片、SX 30から土師器小壺(52)が出土している。

SD 28・29(図版 1・2・4・6・15・18)

6 区東側にある溝で、SD 28は、15 E グリッドで SD 29から分かれて SX 27に接するが、いずれの重複関係も不明である。SD 28の方位は N-20°-W である。SD 29は N-10°-E から N-20°-W と湾曲しつつのびる。SD 28は幅 70~80cm・深さ 10cm 前後の断面形皿状である。これに対して SD 29は幅 70~100cm・深さ 15~20cm の断面形 U 字状と明らかに大きく掘り込まれている。また SD 29は、SD 16と重複する直前の 15 D 25・15 E 5 グリッドのみ幅が大きく広がり、深さ 40cm に落ち込む。SD 29から土師器片・須恵器片が出土し、特に落ち込みのある 15 D 25 グリッドに集中する。SD 29の覆土は酸化鉄を含む粘土で、上層が黒色・下層が暗灰色を呈する。SD 28は SD 29の下層と同一である。

SD 31(図版 1・6・19)

6 区西側にある溝で、方位 N-55°-E である。幅 40~50cm・深さ 5cm 以下の断面形皿状である。酸化鉄を含む暗灰色シルト質粘土の覆土で、IV 層に近似した土が混入する。

SD 32(図版 1・6・19)

6 区から 3 区にかけ一部途切れながら、方位 N-80°-E から N-45°-W に湾曲しつつのびる溝である。幅 100~140cm・深さ 5~20cm で、断面形 U 字状を呈するが、側壁に部分的にテラス状の段をもつ。覆土は暗灰色シルト質粘土で、下層には IV 層に近似した土がブロック状に混入する。出土遺物は土師器小壺(49)・須恵器片などである。

SD 33(図版 1・6・19)

6 区西側にある溝で、南北にのび、SD 32とほぼ直交する。ただしその部分が途切れているため重複関係は不明である。幅 40~80cm・深さ 5~10cm の断面形皿状である。覆土は暗灰色シルト質粘土である。

SD 34(図版 1・6・19)

6 区西側にある溝で、方位 N-80°-W にのび SD 32とほぼ平行する。幅 30~60cm・深さ 5cm 以下の断面形皿状である。覆土の上層は暗灰色シルト質粘土、下層は IV 層に近似した灰白色シルトで酸化鉄を多く含む部分は赤褐色を呈する。土師器片が出土している。

SK 35・SD 36(図版1・6・20)

SK 35は3区20Fグリッドにある土坑である。一部は調査区外に広がるが、検出された規模では、長軸2.6m・短軸2.0mの橢円形状である。深さ15~20cmの断面形皿状で、底面は平らだが深さ23cmの小さな落ち込みがある。覆土は上層が灰色、下層が黄灰色粘土質砂土である。SD 36は方位N-85°-Wに延びる溝で、東端がSK 35と接するが、重複関係は不明である。またSD 32と平行する。幅50~100cm・深さ15~20cmの断面形皿状であるものの、やや急角度に立ち上がる。また溝の幅は、西側が東側に比べて広くなっている。SD 36の覆土はSK 35の下層と同一である。SK 35から土師器碗(43)・須恵器杯(9・27)など遺物が比較的多く出土し、SD 36からは土師器片、須恵器杯(23)・杯蓋(2)などが出土している。

SK 37(図版1・6・20)

3区21・22Fグリッドにある土坑で、長軸4.3m・短軸1.2mの橢円形状を呈する。深さ10~15cmの断面形皿状で、黒色粘土の覆土をもつ。土師器片が出土している。

SD 38・SX 40(図版1・3・16・20)

SD 38は6区南側にある溝で、方位N-45°-Wにのびる。SX 40の南辺に接するが重複関係は不明である。幅50~100cm・深さ5cm以下である。SX 40は前述のSX 26・27・30と同じような性格を持つと推定される遺構である。北西側が調査区外にのび検出できなかつたが、検出された規模に限れば、形状は長軸19m・短軸16mの台形状を呈する。長軸の方位がSD 38の方位と一致する点は6区のSXと等しいが、SX 40溝部分の底面のレベルがSD 38底面より高い部分もあるなど、異なる点も多い。調査時は溝の集まりと考えたため、囲まれた部分の掘り込みを検出していない。SX 40の溝部分は幅70~100cm・深さ5~10cmで一部途切れています。いずれも断面形皿状で、覆土は暗灰色・青灰色粘土およびIV層に近似した土の混合である。SX 40から土師器片、須恵器杯(11・15)などが出土した。

SD 39(図版1・3・6・16)

3区にある溝で、幅50~170cm・深さ10~20cmの断面形皿状であり、底面に凹凸をもつ。方位N-45°-Wで、SD 38・SX 40の長軸と平行する。覆土は暗灰色粘土で、土師器片・須恵器片が出土している。

SD 41・44(図版1・6・16・20)

4区東側にある溝で、SD 44はSD 41と直交しこれを切る。SD 41は方位N-65°-Eにのび、幅30~40cm・深さ3~5cmである。SD 44はN-20°-Wにのび、幅20~30cm・深さ5cm以下である。いずれも断面形皿状で、暗灰色・青灰色粘土の混合した覆土をもつ。

SX 42(図版1・6)

3区南側にある深さ10cmの断面形皿状の落ち込みで、隣接する壁面に掘り込みが広く検出されており、溝の一部の可能性がある。上層が暗灰色、下層が青灰色の粘土の覆土をもつ。須恵

器片が出土している。

SD 43(図版 1)

4 区 25 G グリッドにある溝で、方位 N-25°-W にのび、SD 44 とほぼ平行する。幅30~60cm・深さ 4~8 cm の断面形皿状で、覆土は暗灰色・青灰色粘土の混合である。

SD 45(図版 1・6・16)

4 区にある溝で、26 G グリッドまで N-25°-W にのび SD 44 とほぼ平行したのち、N-20°-E に曲がる。幅20~30cm・深さ 5 cm 以下の断面形皿状で、暗灰色・青灰色粘土の混合した覆土をもつ。須恵器片が出土している。

SD 46(図版 1)

4 区 26 G グリッドにある溝で、方位 N-30°-W にのび SD 44 とほぼ平行する。幅30~70cm・深さ 5 cm 以下の断面形皿状である。

SD 47・48・50(図版 1・6・20)

4 区にある溝で、SD 48 は SD 47・50 と重複しこれを切る。SD 47 は方位 N-5°-E にのびる溝で、幅50~70cm・深さ 5~15cm の断面形皿状である。SD 48 は N-35°~45°-W、幅60cm・深さ 10cm 前後の断面形皿状で、底面に凹凸がある。SD 50 は N-30°-E、幅100cm・深さ 5~15cm の断面形皿状である。いずれも覆土は暗灰色粘土だが、SD 47 の下層には IV 層に近似した土がブロック状に混入する。また SD 48 下層と SD 50 には青灰色粘土が混合する。

SD 49(図版 1)

4 区にある溝で、方位 N-20°-E と、SD 50 とほぼ平行する。幅30~40cm・深さ 5 cm 以下の断面形皿状で、覆土は青灰色・暗灰色粘土の混合である。

第 V 章 遺 物

沖ノ羽遺跡では古墳時代・奈良時代・平安時代・中世・近世の各時期にわたる遺物の出土が認められているが、今回報告する A 地区の出土遺物は平安時代のものが大半を占めており、他時期の遺物はほんの少量で細片である。その器形を把握できないものが多い。また遺物出土総量も他の地区に比べて少なく、整理箱(54×34×10cm)で約10箱であった。土器の整理は袋ごとに洗浄・註記をおこない、遺構・グリッドごとにまとめて接合した。図化可能なものはなるべく実測し、遺構・包含層出土遺物はすべて一括して掲載・記述することにした。前述のとおり A 地区の出土遺物は平安時代、9世紀後半から10世紀前半に属すると考えられる須恵器と土師器が大半を占めており、他には奈良時代の須恵器・土師器、中世の珠洲焼、時期不明の土製品がほんの少量ある。なお須恵器と土師器は、いずれの器種も整形技法・法量が様々であるため、個体数の多いものについてそれぞれ便宜的に分類を行った。

1. 奈良・平安時代

A. 須 惠 器

器種は供膳形態の杯・杯蓋・貯蔵形態の長頸瓶・横瓶・甕がある。杯は高台の有無で 2 器種に分類した。杯頸の底部切り離し技法はすべて回転ヘラ切りで、糸切りはない。

杯蓋(1~5)

1 は口径15.4cm、天井部は水平で全体に占める割合が高く、体部との境はロクロケズリの痕跡を残すが、中央部付近はロクロナデされる。つまみは偏平な擬宝珠形で、中心よりややずれた位置に貼り付けられている。器壁は天井部周縁が厚くなり、体部がやや直線的に下がり、縁部で鋭く屈折して内傾する。また縁部内面に重ね焼き痕があることから、倒位に焼成されたものである。2 は SD 36 より出土し、つまみ中央はくはんで輪状となる。天井部と体部の境は明瞭でなく、縁部にかけて緩やかな弧を描く。つまみは天井部の中央を浅くえぐり込んで貼り付けてあり、器壁の中央まで達している。縁部は短く屈折して内傾する。胎土には径 1~5mm の黒色粒子を多く含む。3 は 2 の形態には類似するが、器高が低く偏平で、縁部は外傾する。4 は天井部がほぼ水平で、体部との境は明瞭である。体部の器壁は天井部に比べて著しく薄く、縁部は内側に折れ曲がる。5 は 4 と胎土・色調ともほぼ同じだが、天井部中央は丸みをもって上方へ反り、縁部は内傾して屈折している。

有台杯(6~9)

高台をもつもので、聖籠町山三賀 II 造跡〔坂井ほか1989〕では形態・法量から大きく3器種に分類している。すなわち身の浅いタイプ「有台杯 A」、身が深くて大きい「有台杯 B」、深身で小型の「有台杯 C」である。それぞれ有台杯 A には 6 と 9 が、有台杯 B には 8 が、有台杯 C には 7 が相当する。

6 の体部はロクロナデの凹凸があまりなく直線的で、口縁端部は丸く収まる。底部外面はヘラ切り後に全面にケズリ調整が施され、高台が付けられる。高台と底面の境は内側に明瞭な部分が多く、周縁に近い部分に付けられ、底部凹状の内端接地となる。9 は SK 35 より出土し、体部の立ち上がりが緩やかな身が浅いタイプと考えられる。高台は内端接地、外面に黒色の薄い自然釉がかかる。8 は器壁が口縁部に近づくにつれ薄くなり 1.0cm 以下で最小となる。部分によっては口縁がそこから徐々に肥厚し、端部で丸く収まる。外面は色調が異なり、底部外面全体に薄く黒色の自然釉がかかっていることから、倒位に焼成されたものと考えられる。7 の体部上半はロクロナデの凹凸が明瞭だが、下半と底部には丁寧に整形が施されてあまりみられない。器壁は全体的に薄手で、口縁端部はやや尖り気味になる。高台は内端接地の形態であるが接地面は狭く、外側に斜めの面をもつ。胎土は精良であるが、径 4mm の長石も含む。

無台杯(10~29)

無台杯は法量の面から I 類(10cm 以上 12cm 未満)と II 類(口径 12cm 以上 14cm 未満)とに分類した。また II 類は底部形態の面から a~c の三つの類型に細分した。

無台杯 I 類(10~13)

12 は底部ヘラ切りの、口径 11.6cm、器高 2.5cm、径高指数(器高/口径 × 100)が 25 のかなり身が浅い形態である。つくりは全体的にシャープで、体部はほとんど直線的に大きくひらきながら立ち上がり、器壁は口縁部に向かって薄くなり尖り気味になる。底部外面には板状圧痕が、口縁部と内面中央一部に黒褐色のタールの付着が認められる。10 は SD 6 より出土している。口径 10.4cm、底径 6.0cm と今回報告する中では一番小型で、ロクロナデの凹凸が著しく、器壁は薄手で堅敏なつくりである。底部は IIc 類に近い。11 と 13 は口径が等しく形態もほぼ類似しているが、底部は 11 が後述する IIb 類、13 は IIa 類に近い。11 は SX 40 より出土している。

無台杯 IIa 類(14~19)

底部から体部の境が丸みをもち、底部外面中央がやや外に張る形態である。器壁は相対的に厚い。15 は SX 40 より出土している。体部はミズビキにより二次調整されており、ロクロナデの凹凸があまりみられず、口縁部の幅 1.0cm 程は体部のひらきに対してもう一回り大きく巡る。16 は酸化焰焼成と考えられ全體が淡赤橙色を呈する。この 15 と 16 は底部内面周縁の凸部がやや擦られている。17 は器壁が底部中央に向かって徐々に薄くなる形態で、18・19 の底部もこの形態に属する。また外面に 18 は「|」、19 は「+」のヘラ記号を有し、18 と同様の記号は 27 にも

みられる。14は口径13.8cm、器高4.8cm、径高指数が35、底部外面が大きく張り出しやや丸底になる。体部との境は不明瞭で、弧を描いて緩く立ち上がる。形態的には8世紀前半と考えられるものの、底部ヘラ切り痕が中央部付近まで達していないことから、このゆがみは切り離す際にできた可能性がある。また一部にはナデ調整が施されている。器壁は相対的に厚く一定している。

無台杯 IIb 類(20~27)

底面がほぼ水平になる形態で、体部との境は21を除いて比較的明瞭である。体部の器壁がa類に比べ薄いものが多い。21は径高指数28のやや身が深い形態である。体部が曲線的に立ち上がり口縁部で外反する。外面ロクロナデで、底部はヘラ切り無調整である。22は口径12.2cmとII類では小型で、器壁に丁寧なナデ調整が施され凹凸がほとんどみられない。また底面にもヘラ切り後にナデ調整が施される。体部は直線的に立ち上がり口縁部でやや外反する。26は底径9.2cm、2区のSD16より出土している。体部外面に屈曲する部分をもち、内面はやや内湾気味になる。

23は口径13.2cm、SD 36より出土している。焼成が軟質で摩滅が著しいが、底部外面にはヘラ切りの痕跡と板状圧痕が良く残る。器壁は底部も含めて全体的に薄く、体部が直線的にややひらいて立ち上がる。同様に体部が大きくひらくものには24がある。口縁部の下0.4~1.4cmはロクロナデのくぼみが明瞭で、色調が異なるため帶状にみえる部分もある。

無台杯よりもむしろ有台杯の形態に近いものに25がある。口径12.4cm、器高3.5cm、径高指数28で底部はヘラ切りの無調整である。焼成は堅く、内外面(青灰色)と断面(赤灰色)の色調は異なっている。底部内面はほぼ水平であるが、周縁で急にくぼみ、体部はそこから直線的に垂直気味に立ち上がる。この体部との境が急にくぼむ形態は、A地区では6区18D・Eグリッド付近のみから出土している。

そのほか底部形態こそa類と違うが、形態・技法が類似しているものがいくつかある。20は17と同じく底部の器壁が周縁を最大厚として徐々に薄くなる器形である。27はSK 35より出土している。18に類似し、ヘラ記号・色調とも全く同じで相違点は底部外面にナデ調整を施すか否かである。

無台杯 IIc 類(28・29)

器形全体を把握できる資料はないものの、底部片が2点ある。29は底径7.6cm、軟質で摩滅が目立つ。28は底部が完存しており、底部外面周縁の一方向に明瞭な数条の沈線が認められるが、これは板状圧痕ではなく、切り離し段階に出来たヘラ抜きの際の痕跡と考えられる。また周縁近くには薄墨であるが墨書きなされ、「且」または「旦」の字と思われる。

長頸瓶(30~33)

30は口径16.6cmの長頸瓶、または広口壺の口頸部と考えられる。頸部がラッパ状に大きく外

反し、端部でやや上方へつまみ上げられる。口縁部は外側に凹状の広い面をもち、内面は一面に灰をかぶっている。31は頸部が直線的に立ち上って上部1/3程からラッパ状にひらき、端部でやや段をもつ。体部との境は一部が残存し、肩部が張る器形が想定される。緑色の自然釉が口縁部内面と外側の凹状の広い面、頸部外面の下部の一部にかかる。33は色調が全体に白っぽく、胎土は緻密で比較的滑らかな表面である。内面ロクロナデ、外面ロクロケズリで底部はヘラ切り後にナデ調整が施され、周縁はロクロケズリにより斜めの面をもつ。高台底部は凹状で外端接地する部分が多い。32は長頸瓶の胴部片と考えられる。内面ロクロナデ、外面ロクロケズリで、胎土・色調とも33に類似するがより精良で、大粒の白色粒子を含む。

横瓶(34~36)

34の口縁部は大きくひらき、やや外斜する凹状の瀧面をもつ。内外面ともロクロナデで、内面上半は特に凹凸が著しく、緑色の自然釉が全体にかかる。体部内面は同心円状の叩きと考えられる。36は充填部の粘土版で、外面にカキ目を弧状に施す。また中央にはし字状の、工具痕と思われる記号のようなものがある。黒色の薄い自然釉が2/3程にかかる。35は体部外面が平行叩き目、内面が同心円、または弧状である。口縁部はほぼ直線的にひらき、端部がやや肥厚する。口縁部内面と体部外面には薄い無色の自然釉がかかる。

甕(37~42)

37は口頸部がほとんど直線的にたちあがるが口縁部で強く外反し、外側に広い面をもって上下方向にひき出される。この形態・手法は長頸瓶に同一のものがあり、内外面ともロクロナデである。胎土には径4mmの長石を含む。38は外面が灰赤色、内面が黒色と色調が大きく異なり他の須恵器と比べ異質な感じを受ける。口縁部は短く外反し、端部が肥厚してほぼ水平な瀧面をもつ。体部外面は平行叩き目+カキ目、内面は斜方向のハケ目の後にカキ目を施すことによって丁寧に接合部を消している。39は口縁部が緩く外反し、端部は外端が下方へ突出し、やや丸く幅広な面を有する。外面には口縁部と2条の沈線の間に波状文が施文される。40と41は胴部破片で、40は色調・胎土・手法から38と同一個体と考えられる。41は大型品の底部に近い部分と考えられ、外面が擬格子状、内面は上部が同心円状で下部が格子状と異なっている。42は口径20.2cm、胴部最大径42.2cmの甕で、口頸部が緩く外反してひらき、端部は外側に引き出されて外斜する面をもつ。口頸部は内外面ともロクロナデである。体部外面は平行叩き目が主だが上部はカキ目が施され、下部には当て具が斜方向に組み合って斜格子にみえる部分もある。底部付近はケズリにより叩き目が消され滑らかである。内面は胴部が同心円状、底部付近は平行当て具の上に中央部から放射状にのびるハケ目がある。器壁は底部に近づくにつれ厚くなるが相対的に薄く、一番薄いところでは3mm程度になる。

B. 土 師 器

供膳形態の椀と杯、煮沸形態の甌と鍋がある。出土した土師器の多くは遺存状況が不良で、もろくて器面が剥離・摩滅しており、全形を知り得る資料はほとんどない。

椀(43-46)

すべて無台椀で形態の面から2器種に分類できる。すなわち身の浅いタイプの「無台椀A」と深身の「無台椀B」で、無台椀Aには43・44が、無台椀Bには45・46が相当する。43はSK 35より出土し、径高指数は27、全面ロクロナデである。底部は回転糸切り無調整で円形に段をつくり、内面中央はややくぼむ。器壁は体部下部が最も薄く、口縁部に向かい徐々に肥厚する。胎土に白色粒子と径8mmの砾を含む。44は底部のみの破片であるが、その体部のひらきから身が浅いタイプと考えられる。底面が摩滅しているため切り離し技法は不明である。46と45は口径に差はあるものの径高指数は近似している。46は径高指数35、体部が丸味をもつ口縁端部でわずかに外反する。器壁は相対的に厚く、他の椀に比べて重い感じをうける。45は径高指数37、口縁端部はやや肥厚して外反する。焼成・胎土とも良好で、ロクロナデと回転糸切りの痕跡をよく残す。

杯(47)

底部のみの破片だが、有台杯と考えられる。底部内面はほぼ水平で、周縁部付近にわずかに立ち上がりがみられる。高台は外側にふんばるが外縁接地となり、接合部はロクロケズリにより凹線状を呈している。焼成不良の須恵器の可能性もある。

甌(48-55)

その形態・口径の大きさから長甌(48)・小甌(49-55)の2器種に分類した。

48は口径19.6cm、口縁部が体部から「く」の字状に屈折して外傾し、外面に緩い曲面をもつ。器壁は口縁端部が最も厚く、体部に近づくにつれ薄くなる。体部には内外面ともカキ目がみられる。底部はすべて小甌の底部と判断したが、53は底部が9.6cmと大きく、平底形態の長甌である可能性も残す。すべてロクロ整形の底部で、底部外面には明確な切り離しや調整痕のない「不調整」なものと「糸切り」のものがある。摩滅のため明確ではないが51は回転糸切り、49は静止糸切りと考えられ、他はすべて不調整である。52・53・55は内面にカキ目が施され、54・55はロクロナデの凹凸が著しい。体部の立ち上がり方は49を除いてほぼ共通し、底面外周縁が凸状に段をもつものもある。49はSD 32より、52はSX 30より出土している。

鍋(56-59)

4点を実測した。口径はほぼ同じ大きさである。56は口縁部が体部からほぼ水平方向に屈折し、端部が上方につまみ上げられて端面に凹線上の部分をもつ。57の体部外面は粗いカキ目で、ほかはロクロナデである。口縁部は外上方へ直線的にひらき、端部は外側に広い面をもつ。58

3. 土 製 品

は内外面ともロクロナデで、外面に若干の凹凸がみられる。口縁部は直線的に開き、器壁が徐々に肥厚する。59は口縁部が相対的に長く、体部からの屈折度が大きい。口縁端部は上方へのつまみ上げが大きくやや受け口状を呈している。内外面ともロクロナデで、胎土に径2~3mmの礫を多く含む。

2. 中 世(60)

中世の遺物としては珠洲焼の壺の肩部片を1点図示した。肩が強く張る器形で、外面の叩き目は3条の隆起線2本または3本を一単位とし、内面は長軸3.5cm程の楕円形押圧痕である。混入物はほとんど無いが胎土は粗く、外面には浅黄色に変化した灰かぶりがみられる。

3. 土 製 品(61~64)

「器」としての機能を失ってから転用されたもので、61は砥石のような研磨具として使用されたものと考えられる。珠洲焼の破片で表裏両面とも凸状の部分を中心に滑らかな擦り面があり、表の面の左側2/3の部分は特に顕著である。また図の中央の面には斜めに打ち欠いた面があり、やや摩滅していることから考えて、掘り方向が定まっていた可能性がある。他の断面には使用の痕跡は認められない。

62~64はいわゆる「円板状土製品」または「メンコ」と呼ばれるもので、中世の集落遺跡からの出土例が多い。用途としては冥錢説、玩具・遊戯具説、めんこ説、数え玉説などが挙げられるが、依然としてその性格は不明である。長径2.5~2.8cm、短径2.0~2.3cmで円形よりむしろ方形に近いが、四隅には打ち欠きの跡が明瞭に残る。

第2表 沖ノ羽遺跡A地区遺物法量表

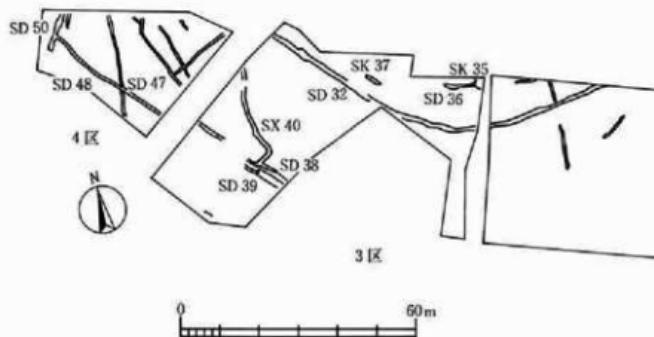
法量()内は推定値

番号	地 点	種別	器種	法 量	番号	地 点	種別	器種	法 量
1	23F7他	須恵器	杯蓋	口 15.4 高 3.3	22	24E14他	須恵器	無台杯	口 12.2 底 7.8
2	S D36(20F)	須恵器	杯蓋	口 14.8 高 2.9	23	S D36(20F)	須恵器	無台杯	口 13.2 底 7.2
3	20F1	須恵器	杯蓋	口 14.4 高 2.4	24	17F	須恵器	無台杯	口 13.2 底 8.0
4	21F	須恵器	杯蓋	口 14.4	25	18E2他	須恵器	無台杯	口 12.4 底 8.8
5	23F6他	須恵器	杯蓋	口 16.8	26	S D16(10C)	須恵器	無台杯	高 3.5
6	18D21他	須恵器	有台杯	口 13.8 底 10.0 高 4.6	27	S K35(20F)	須恵器	無台杯	底 9.2
7	23E21	須恵器	有台杯	口 9.8 底 4.5	28	23E19	須恵器	無台杯	底 8.8
8	24E3他	須恵器	有台杯	口 13.6 底(8.8)	29	23E19	須恵器	無台杯	底 8.6
9	S K35(20F)	須恵器	有台杯	底 9.4	30	2区	須恵器	長頸瓶	口 16.6
10	S D6(4C20)	須恵器	無台杯	口 10.4 底 6.0	31	24E21他	須恵器	長頸瓶	口 9.6
				高 3.1	32	3D5	須恵器	長頸瓶	-
11	S X40(23E15)	須恵器	無台杯	口 11.4 底 7.4	33	7F11他	須恵器	長頸瓶	底 7.2
				高 3.3	34	19E15	須恵器	横瓶	口 15.0
12	I区表採	須恵器	無台杯	口 11.6 底 7.6	35	20E	須恵器	横瓶	口 12.4
				高 2.5	36	11D5	須恵器	横瓶	-
13	24E9	須恵器	無台杯	口 11.4 底 8.0	37	7C	須恵器	甕	口 (38.2)
				高 3.5	38	5E3他	須恵器	甕	口 23.2
14	24F12他	須恵器	無台杯	口 13.8 底(7.8)	39	21F	須恵器	甕	-
				高 4.8	42	23E15他	須恵器	甕	口 20.2
15	S X40(24E6)	須恵器	無台杯	口 12.8 底 9.2	43	S K35(20F)	土師器	無台碗	口 13.0 底 4.8
				高 3.4	44	12E	土師器	無台碗	高 3.5
16	21F	須恵器	無台杯	口 13.8 底 9.6	45	9E2	土師器	無台碗	底 6.0
				高 3.4	46	4D1	土師器	無台碗	底 6.0
17	5E4他	須恵器	無台杯	口 13.0 底 9.0	47	4E5	土師器	杯	高 4.4
				高(3.4)	48	19E20	土師器	長嗣甕	底 6.0
18	19F12他	須恵器	無台杯	底 10.0	49	S D32(3区)	土師器	小甕	高 4.9
19	24F6他	須恵器	無台杯	底 8.2	50	23E9	土師器	小甕	底 6.0
20	5E4他	須恵器	無台杯	口 13.4 底 9.4	51	7F25	土師器	小甕	底 7.0
				高 3.0	52	S X30(15D10)	土師器	小甕	底 7.8
21	4D13他	須恵器	無台杯	口 13.8 底 7.6	53	23F12	土師器	小甕	底 9.6
				高 3.9	54	23F4	土師器	小甕	底 7.8
					55	23F8	土師器	小甕	底 7.6
					56	10D11	土師器	鍋	-
					57	23F21	土師器	鍋	口 39.0
					58	23F21	土師器	鍋	口 41.6
					59	17F1	土師器	珠洲燒	口 (43.2)
					60	16C15	珠洲燒	-	

第 VI 章 ま と め

最後に沖ノ羽遺跡 A 地区の調査成果をまとめておく。A 地区は平野部の微高地の南側周縁に立地しており、調査範囲は東西約380m、南北45m前後、面積約12,000m²である。遺跡の時期は平安時代が主体と考えられる。

遺跡の時期は、出土遺物の大半が9世紀後半～10世紀に属することから、多少の時期差はあるものの、ほぼ同時期の遺構が多いものと考えられる。遺構の重複関係も、一部を除いてほとんど確認できなかった。この時期の遺跡では上越市一之口遺跡西地区に見られるように、掘立柱建物と井戸・土坑がセットになった居住区と、その周辺に畠(鉢状遺構)がつくられる例が多いが、A 地区では検出できなかった。一方、A 地区の西側にある微高地上に立地している B・C 地区では、居住区と畠(鉢状遺構)の組み合わせが 2 単位確認されている。また A 地区の北側にも微高地は存在するが、A 地区はその微高地の南縁部であるため、集落(居住区等)に相当する部分はその微高地上、特に SK 35・SD 36 およびその周辺など遺物の出土量の多い 3 区の北側に展開していたと推定される。よって A 地区で検出された溝や性格不明の遺構等は、集落に隣接して営まれた何らかの生産関連遺構の可能性が高く、低地開発の一端がうかがえる。SD 2・16・29・32 はおそらく用排水路的な機能をもち、特に SD 32 はその北側に、他区にはない SK 35・37 のような土坑が存在することからも、集落と生産関連遺構との境的な役割をもっていたと考えられる。また SX 26・27・30 は現在「堀田」と呼ばれる水田と規模こそ違うが、

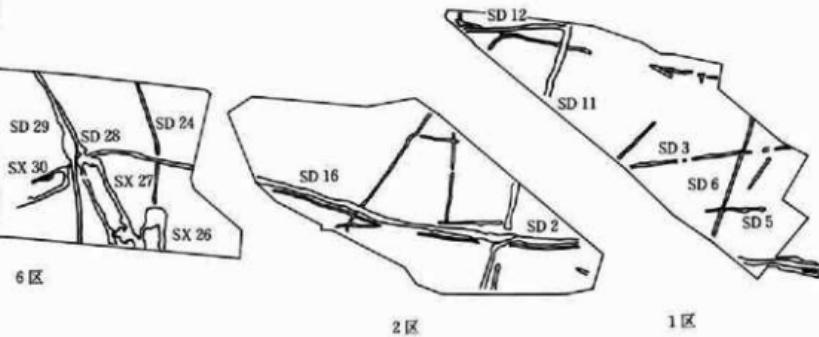


第 8 図 沖ノ羽遺跡 A 地区遺構配置模式図

周縁が一段低く掘り込まれて溝状を呈しているなどの共通性を指摘できる。これら性格不明遺構と溝は、SX 27とSX 30の長軸方位がほぼ直交し、あるいはSD 16がSX 30に重複する際にはSX 27をよけるように方向を変えていることなどから、何らかの計画性をもって作られたと見られる。その他の特徴としてはSD 38・39は、延長方向が調査区外にのび、SX 30も延長方向が擾乱を受けるなどして検出できなかったが、ともにSD 32から30~35mの距離に位置しており、SD 32と同様の弧を描いてつながる可能性がある。その他、1・2区には掘り込みこそ浅いが直交方向の溝が多くあり、ほぼ方形の区画を呈する場合が多い。

出土遺物は整理箱にして約5箱が出土したが大半は土師器で、須恵器の約2倍の量を占める。時期は9世紀後半~10世紀のほか、8世紀のものが若干ある。古い時期の遺物には6・14・16・47などが相当し、口径が13.3cm以上と大きく、器壁は厚手のものが多い。6は「今池遺跡」〔坂井ほか1984〕のIII期頃に比定できる。新しい時期は「山三賀II遺跡」〔坂井ほか1989〕のIV期には相当する。いわゆる佐渡小泊産須恵器が大量に流通する時期だが、おなじような状況が沖ノ羽遺跡でも認められた。製作上注目すべきものとしては36の横瓶の充填部粘土板があり、カキ目の後に施された工具痕と思われるL字状は、杯の底部外面に施されるヘラ記号と似た性格をもつ可能性がある。また42の甕の底部内面に放射状に施されたハケ目は他に類例が無く、今後の資料の増加を待ちたい。

以上、簡略にA地区の調査成果を述べたが、時期などにおいては資料数が少ないために不明瞭な部分が多い。また今回当遺跡を第1章2に述べたとおりA-Cの3地区に分けて、A地区を集落に隣接した生産関連部分に、B・C地区を集落およびその周辺と想定したわけだが、まだB・C地区は未整理のためその性格は大きく変わる可能性がある。よって整理が進んだ段階での再検討が今後の課題となるだろう。



要 約

1. 沖ノ羽遺跡は、新潟県のほぼ中央部、新津市大字七日町字沖ノ羽他に所在する。当地は能代川・阿賀野川・小阿賀野川に囲まれた沖積平野である。遺跡は阿賀野川が形成したと考えられる微高地の上に立地しており、標高4.0~5.8mである。遺跡の性格に応じてA・B・Cの3地区に大別した。A地区は沖ノ羽遺跡の東側にあたり、微高地の南側周縁に位置する。標高4.5~4.9mである。
2. 発掘調査は磐越自動車道いわき~新潟線の建設に伴い、平成2年度から4年度にかけて実施した。調査面積は約41,000m²におよび、うちA地区は約12,000m²である。
3. 調査の結果、A地区からは奈良・平安時代の遺構・遺物が検出された。50基の遺構のうち42基は直線的な溝で、そのほかに土坑が3基、性格不明遺構が5基であった。大半の遺構は9世紀後半~10世紀のものと考えられる。
4. 6区の性格不明遺構は現在「堀田」と呼ばれる水田と共通性があり、それと接する溝の配置に計画性が見られることなどから、A地区的遺構は、集落に隣接した何らかの生産関連遺構の可能性が高い。集落は、遺物出土量が多い微高地の3区の北側に展開していたと推定される。
5. 出土土器は大半が土師器・須恵器で、土師器の量は須恵器の約2倍である。時期は、奈良時代の遺物が8世紀(一部は今池遺跡III期頃に比定)、平安時代の遺物が9世紀後半~10世紀(山三賀II遺跡IV期頃に比定)のものである。そのほか中世の珠洲焼・時期不明の土製品が少量ある。

引用・参考文献

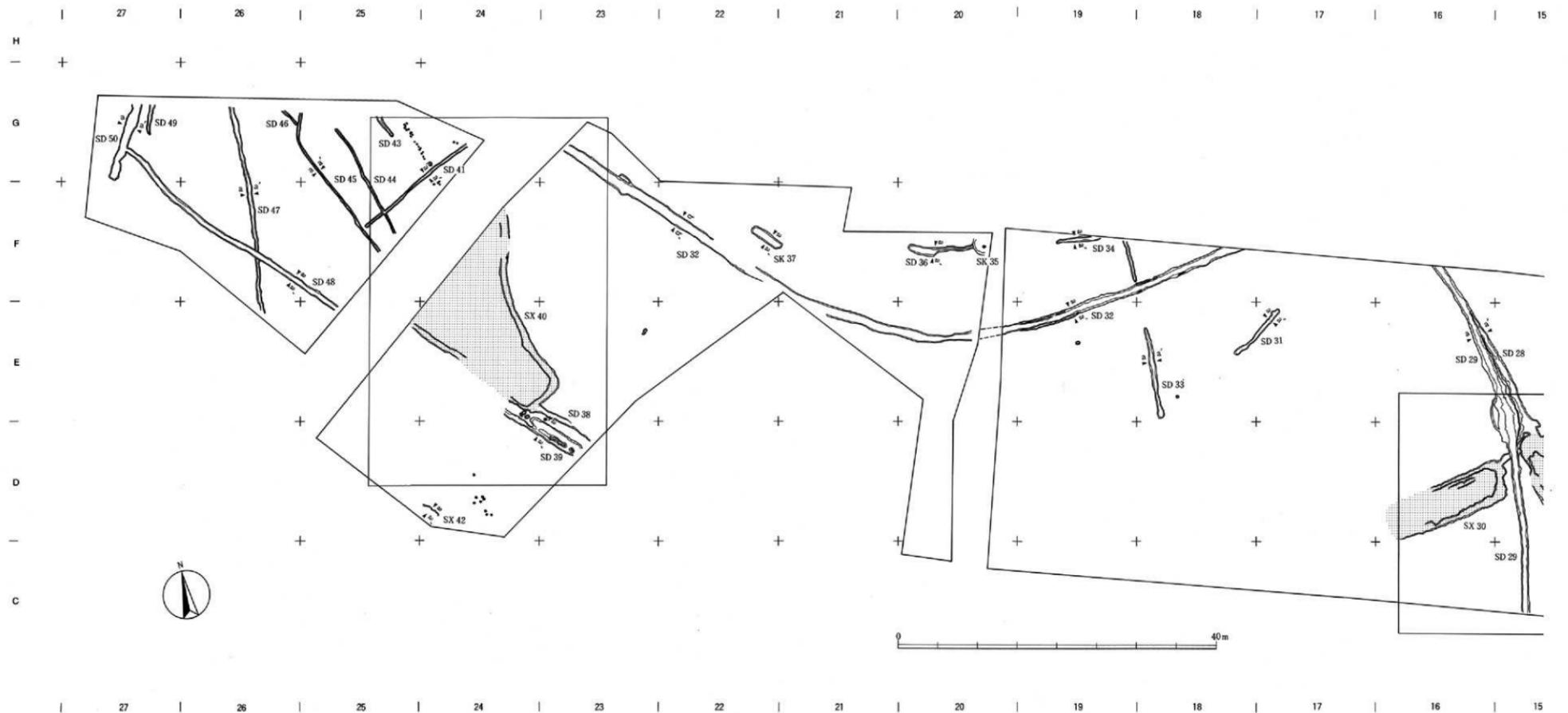
- 阿部洋輔・田村 裕ほか 1987 「中世の舞台」「鎌倉武士と莊園」『新潟県史』通史編2 新潟県
- 甘粕 健・川村浩司ほか 1992 「古津八幡山古墳I」 新津市教育委員会
- 甘粕 健・荒木勇次ほか 1989 「保内三王山古墳」 三条市教育委員会
- 家田順一郎ほか 1981 「曾根遺跡I」 豊浦町教育委員会
- 家田順一郎ほか 1982 「曾根遺跡II」 豊浦町教育委員会
- 植村敏秀・中村豊次郎ほか 1978 「蒲原低湿地帯における集落立地—亀田郷の場合—」『新潟県文化財調査年報第17 亀田郷』 新潟県教育委員会
- 小村 式 1983 「都市の統制」「幕藩体制の基礎的研究」 吉川弘文館
- 温古談話会 1893 1977復刊 「温古の葬」(下) 歴史図書社
- 垣内光次郎・芝田悟 1984 「普正寺遺跡」 石川県立文化財センター
- 川上貞雄ほか 1983 「馬場屋敷遺跡等発掘調査報告書」 白根市教育委員会
- 川上貞雄ほか 1989 「考古」「新津市史」資料編第1巻 新津市
- 木村茂光 1982 「大開拓時代の開拓—その技術と性格—」「技術の社会史」1 有斐閣
- 木村宗文 1986 「越後國延喜式内社の所在をめぐって」「政治社会史論叢」 山田英雄先生退官記念会編
近藤出版社
- 木村宗文 1988 「古代蒲原郡の郷と式内社」『新潟中央高等学校研究年報』35
- 木村宗文・竹田和夫・田村 裕 1989 「文献」「新津市史」資料編第1巻 新津市
- 木村宗文 1989 「城跡」「新津市史」資料編第1巻 新津市
- 小山正忠・竹原秀雄 1991 「新版標準土色帖1991年版」 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・日本研修事業株式会社
- 坂井秀弥・戸根与八郎ほか 1984 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡」 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥ほか 1986 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第40集 一之口遺跡西地区」 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥ほか 1989 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集 山三賀II遺跡」 新潟県教育委員会
- 鈴木郁夫 1974 土地分類基本調査「新津」 新潟県農地部農地建設課
- 鈴木郁夫 1989 「自然」「新津市史」資料編第1巻 新津市
- 岡 雅之・澤田秀美ほか 1989 「新五兵衛山道路I」 豊栄市教育委員会
- 田村 裕 1988 「中世越後国の地域構造」「北日本中世史の総合的研究」 昭和61~62年度科学研究補助金研究成果報告書 代表羽下徳摩 東北大学文学部
- 中蒲原郡役所 1915~1918 1986復刊 「中蒲原郡誌」新津市編 鹿川書店
- 永田 啓・神田 章ほか 1973 土地分類基本調査「新潟」 新潟県農地部農地計画課
- 新潟県 1983 「新潟県史」資料編4

- 新潟県 1986 「『新潟県史』 資料欄 中世 福島(一)」『新潟県史研究』第19号
- 新潟古砂丘グループ 1974 「新潟砂丘と人類遺跡—新潟砂丘の形成史—」『第四紀研究』13—2 日本第四紀学会
- 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1990 「草戸千軒町遺跡—第44・45次発掘調査概要—」 広島県教育委員会
- 福井県教育委員会・福井県立朝倉氏遺跡資料館編 1983 「特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡 県道鰐江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書」 福井県教育委員会・福井県立朝倉氏遺跡資料館
- 山田英雄 1981 「延喜式の弥彦神社について」『かみくひむし』第43号 かみくひむしの会
- 吉田東吾 1902 「大日本地名辞書」 富山房
- 渡邊朋和 1991 「上浦遺跡発掘調査報告書」 新津市教育委員会
- 渡邊朋和 1992 「長沼遺跡発掘調査報告書」 新津市教育委員会

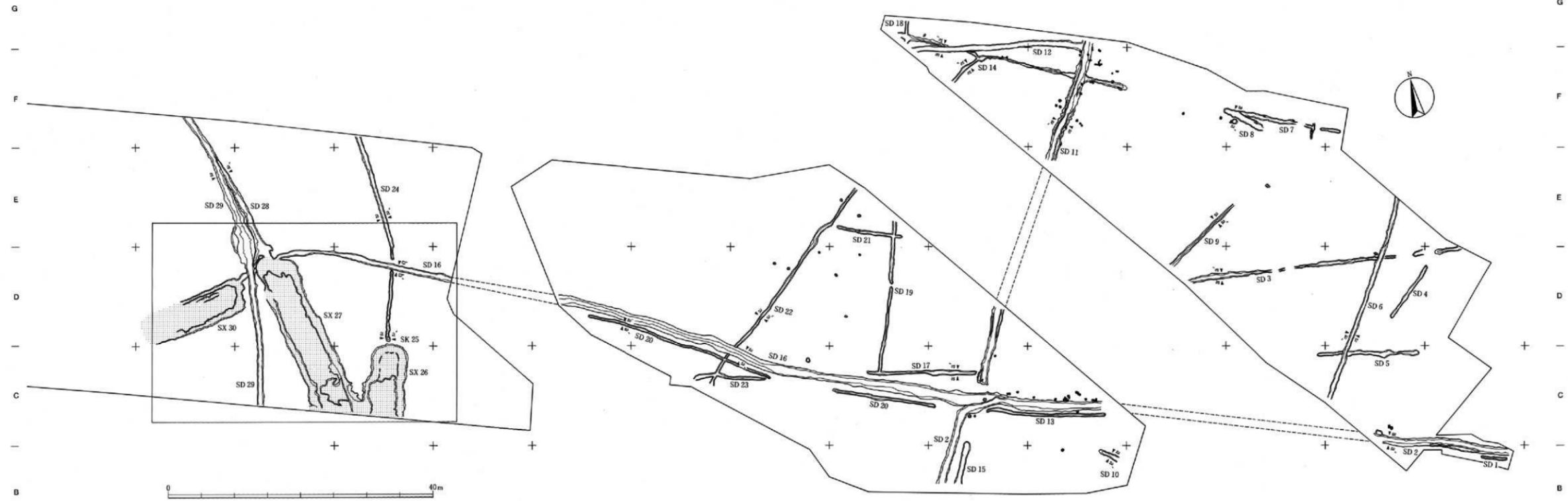
図版

凡例

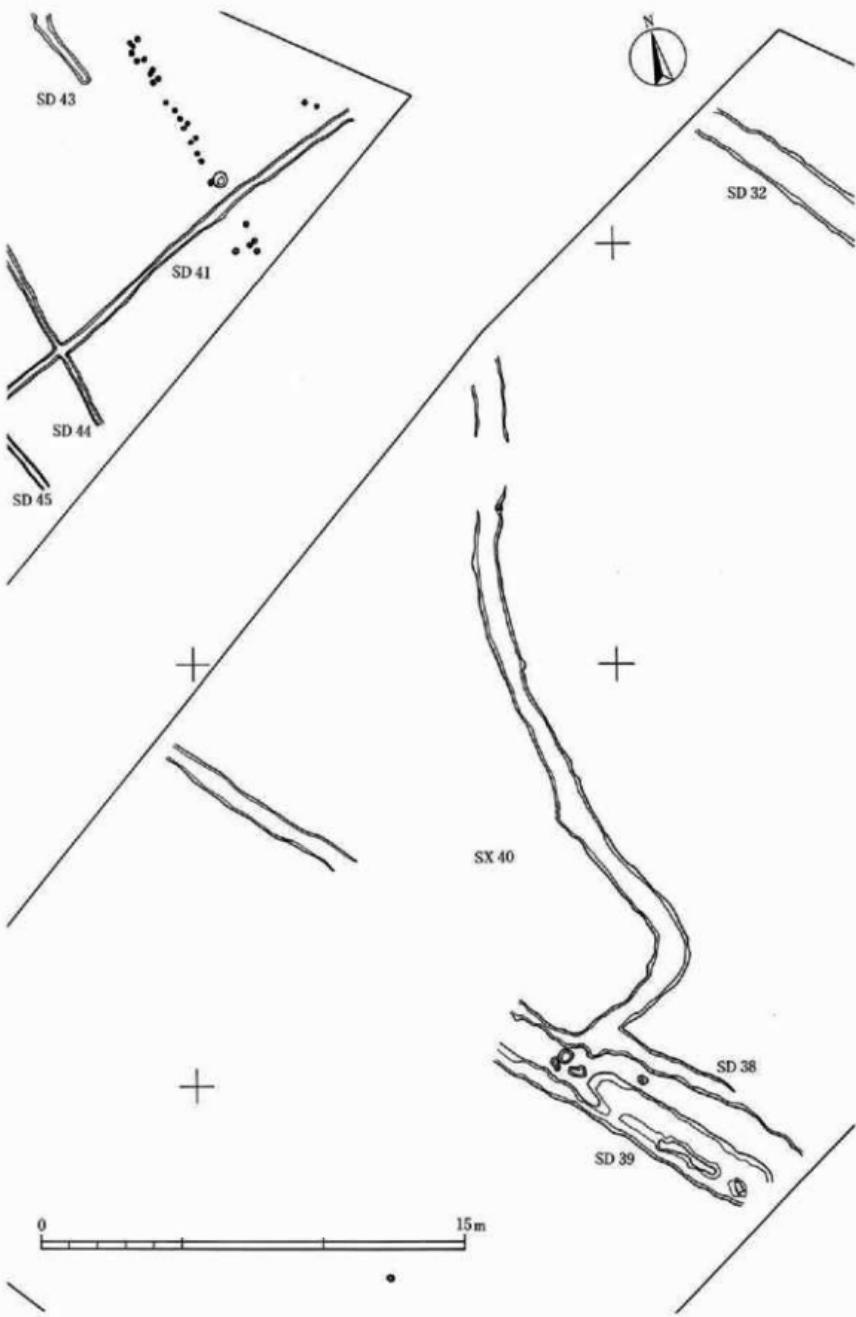
1. 造構はすべて束縛より一連番号を付し、
掘立柱建物=SB、溝=SD、井戸=SE、土
坑=SK、ピット=P、性格不明造構=SX、
などで分類した。
2. 造構実測図は1:400と1:200の2種作
成した。1:400図に關係する造構実測図
は、別の図版に一括しておさめた。
3. 土器はすべて一連番号を付し、写真とこ
れと共通させた。土器の種別によって断面
の表示を、土師器・珠淵甌(白抜き)、須
恵器(墨)とした。
4. 造物実測図において、口徑復元が困難な
ものは、中心線と外形線を離すか、断面と
外形線のみ表示した。

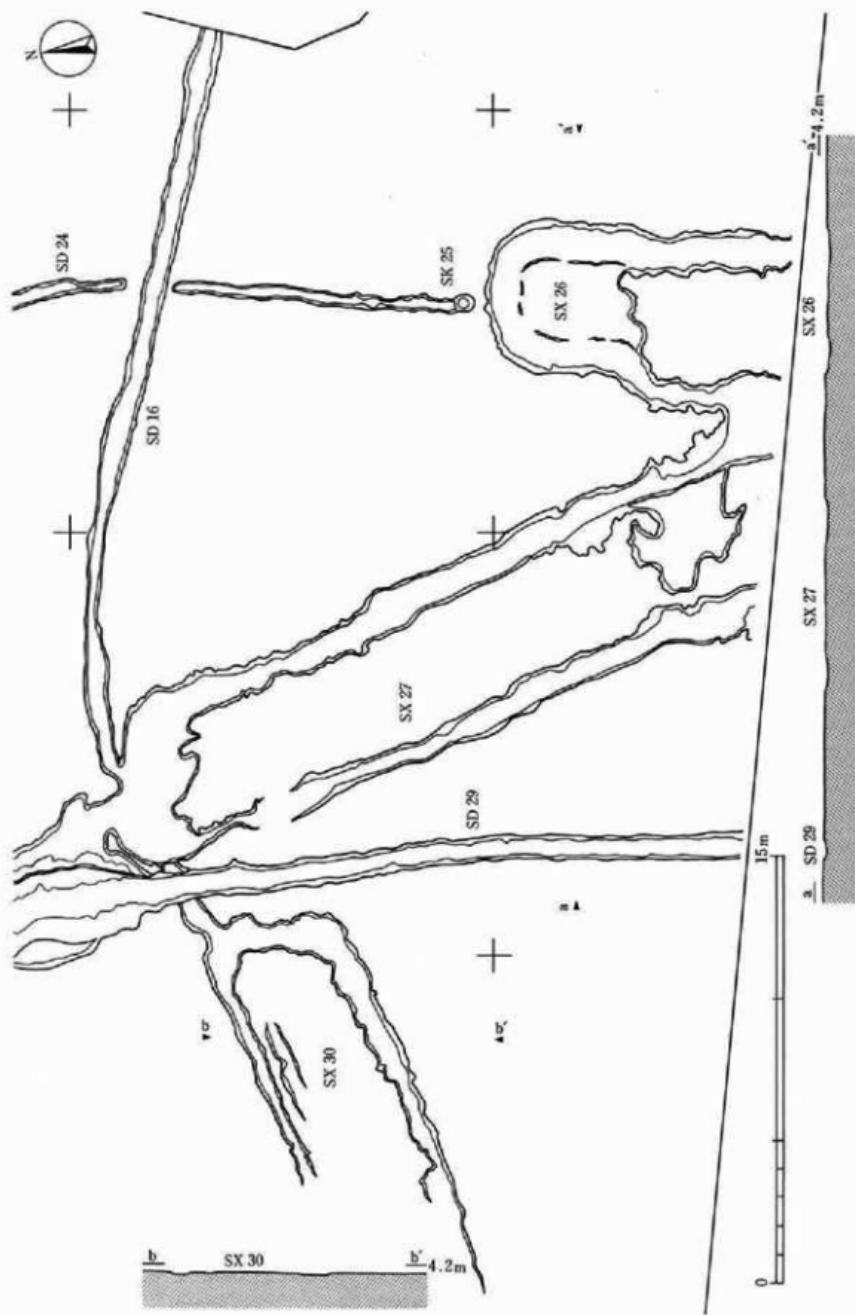


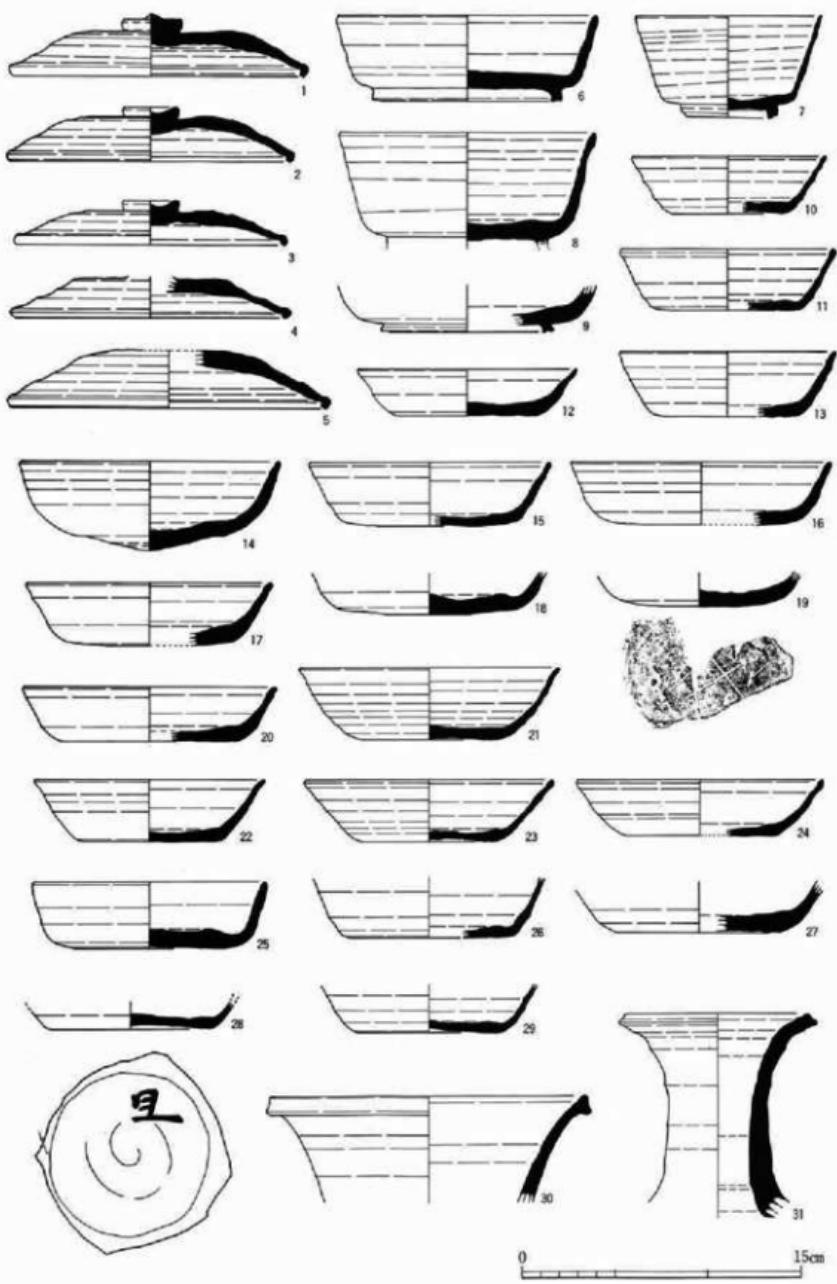
17 | 16 | 15 | 14 | 13 | 12 | 11 | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 |

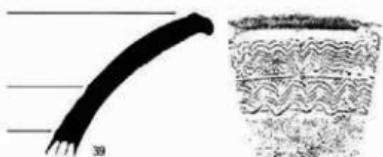
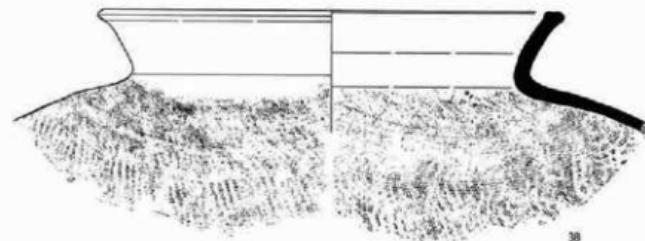
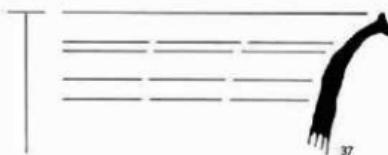
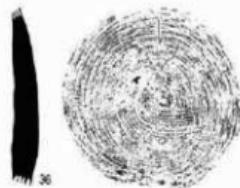
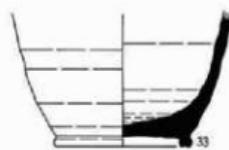
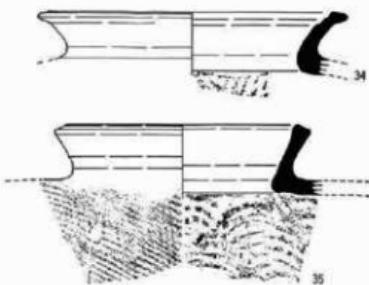
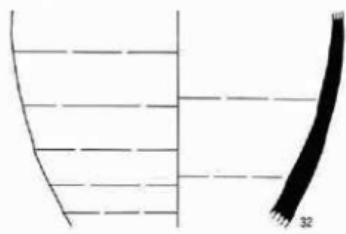


17 | 16 | 15 | 14 | 13 | 12 | 11 | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 |



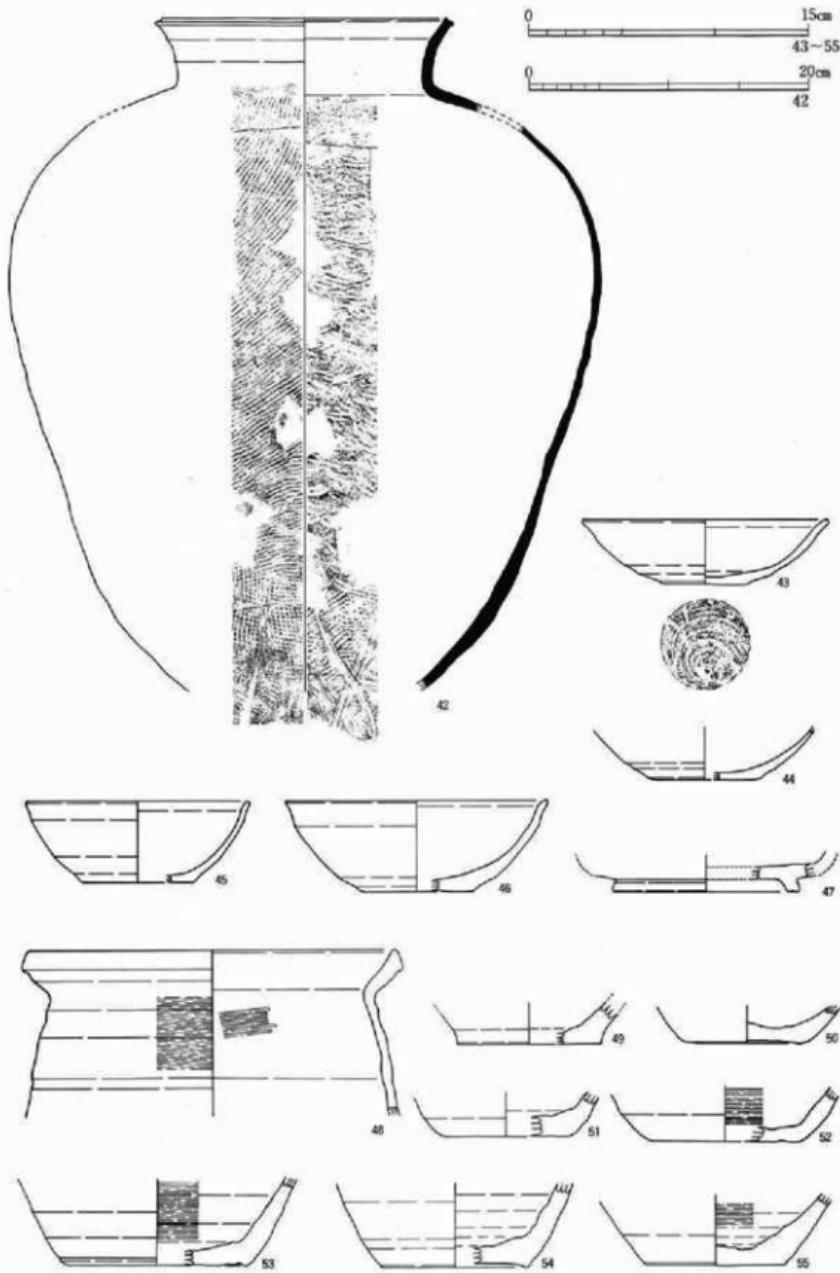


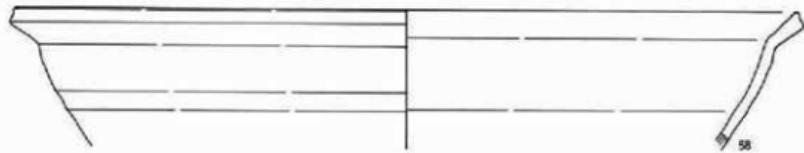




0 15cm







0 15cm
56~60



0 10cm
61~64

60 珠洲焼 61 転用砥石 62~64 円板状土製品

阿賀野川

高筋

新潟市

中ノ沢跡

猪母山



1 調査前全景
(東から)



2 1区全景
(北西から)



3 2区全景
(南西から)



1 3区全景
(東から)



2 4区全景
(北東から)



3 6区空中写真
(上が北)



1 6区土層断面
(南から)



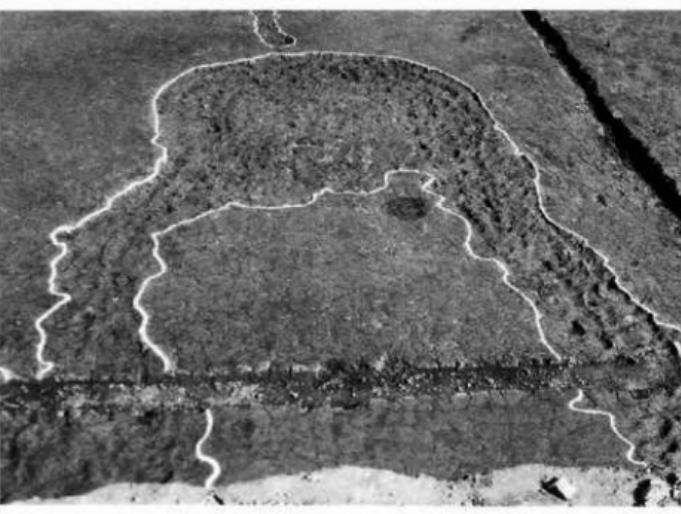
2 SD 11・2・16
(北東から)



3 SD 16・20
(西から)



1 SX 27 (南から)



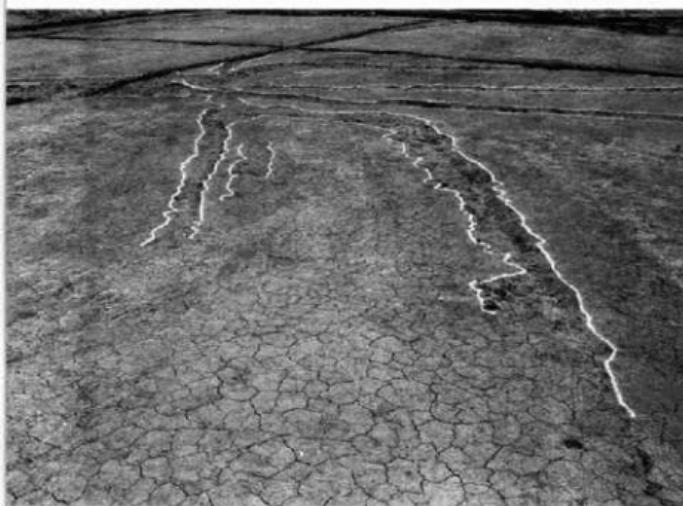
2 SX 26 (南から)



3 SD 28・29
(南から)



1 SD 38・39・SX 40
(南東から)



2 SX 30 (西から)

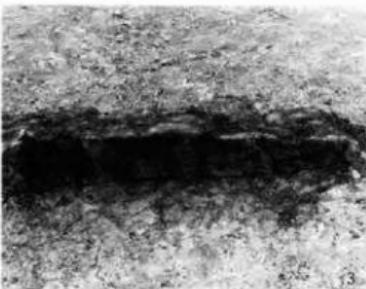


3 SD 41・44・45
(東から)

1 SD 2 土層断面
(西から)

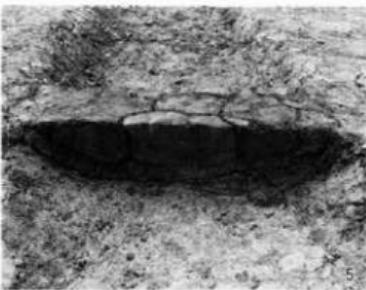


3 SD 3 土層断面
(東から)



4 SD 3 (西から)

5 SD 6 土層断面
(北東から)



6 SD 6
(南西から)

7 SD 11 土層断面
(北東から)



8 SD 11
(南西から)

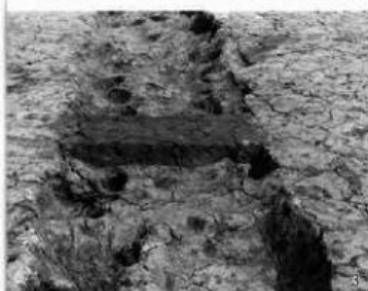
9 SD 12 土層断面
(東から)



10 SD 12 (西から)

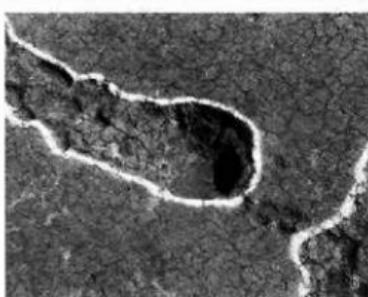


1 SD 16 土層断面
(北西から)



3 SD 24 土層断面
(南から)

4 SD 24 (南から)



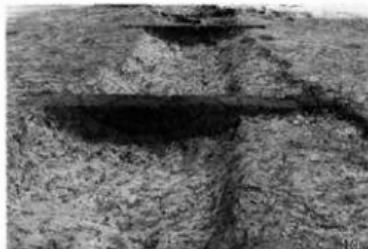
5 SK 25 土層断面
(南から)

6 SK 25 (西から)



7 SD 22
(西南から)

8 SX 26 土層断面
(南から)



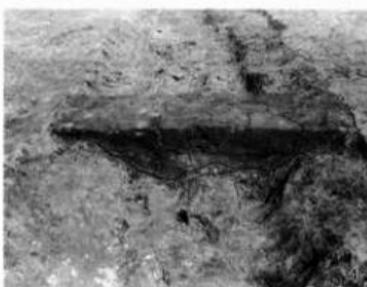
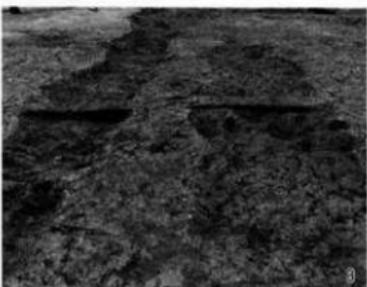
9 SX 27 土層断面
(南から)

10 SD 28・29 土層断面
(南から)

1 SD 31 土層断面
(南西から)



2 SD 31
(南西から)



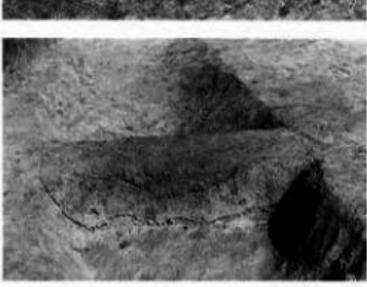
3 SX 30 土層断面
(西から)



4 SD 32 (6区)
(西から)

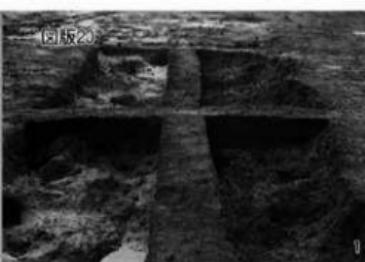


6 SD 32 (3区)
(南東から)



7 SD 33 土層断面
(南から)

8 SD 33 (南から)



1 SK 37土層断面
〔南西から〕



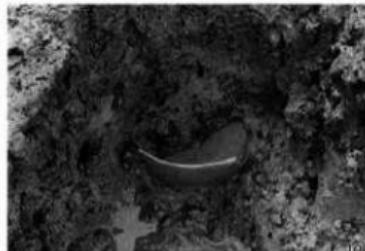
3 SK 35 (北から)
4 SD 36 (西から)



5 SX 40土層断面
〔南東から〕
6 SD 41土層断面
〔南西から〕



7 SD 50土層断面
〔南から〕
8 SD 50 (南から)



9 3区土器(7)
出土状況
10 3区土器(8)
出土状況



1



14



3



15



6



16



7



17



8



21



43



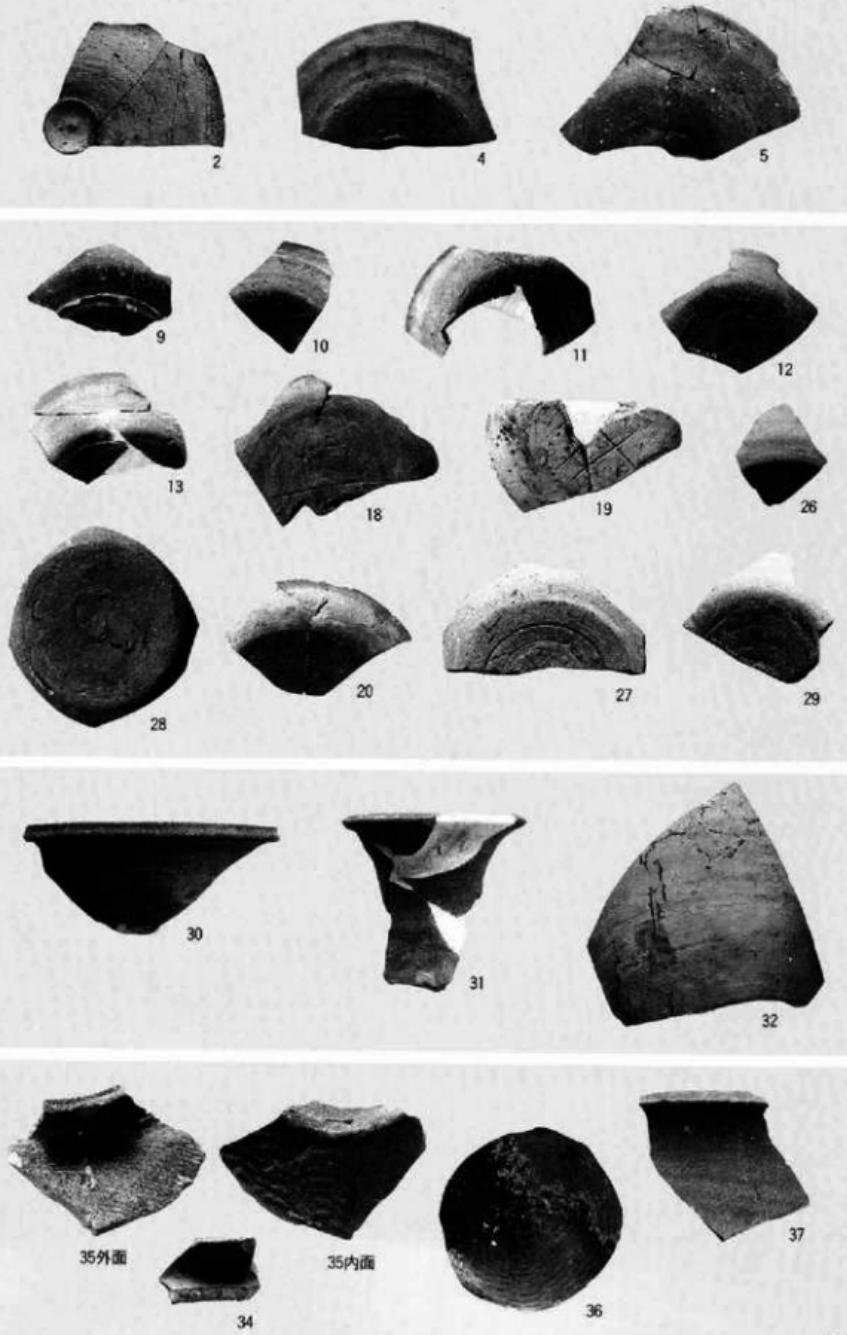
22

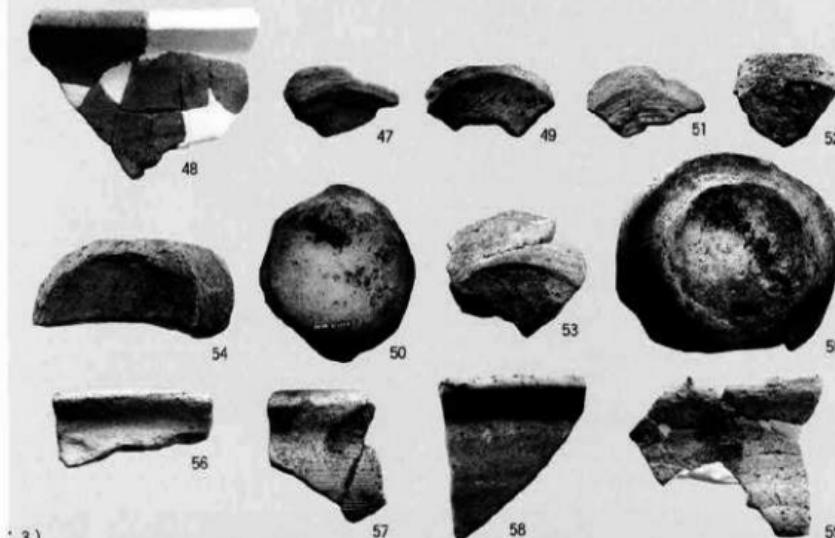
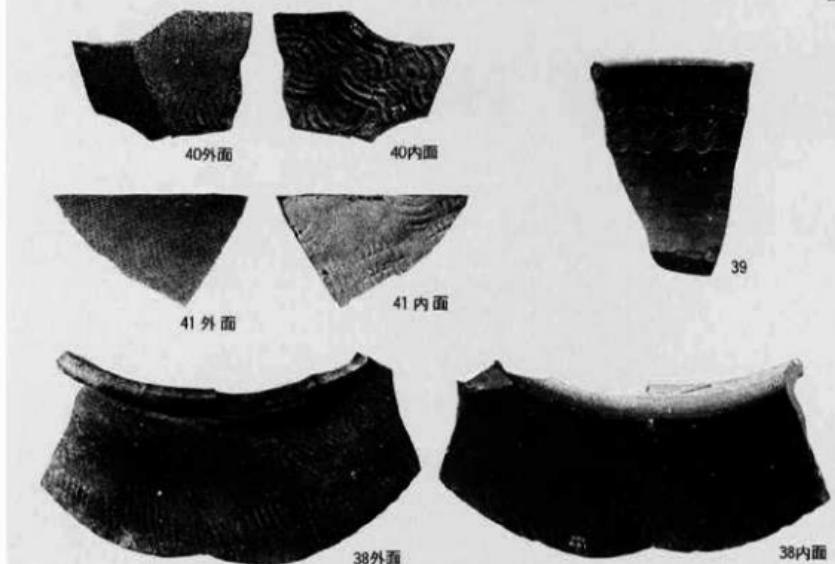


23



24







60外面



60内面



62外面



62内面



61外面



61内面



63外面



63内面



64外面



64内面

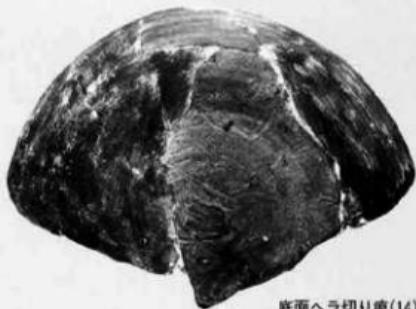


42外面



42内面

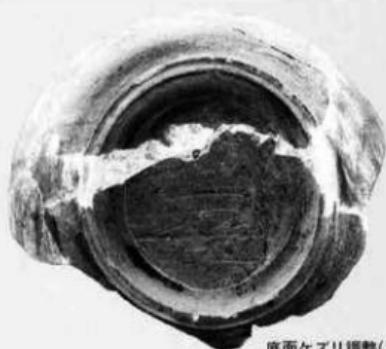
(42 1 : 4)
(はか 1 : 3)



底面ヘラ切り痕(14)



底面ヘラ切り痕および板状圧痕(23)



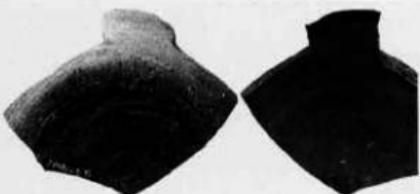
底面ケズリ調整(6)



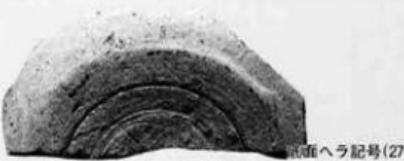
ヘラ抜き痕および墨書き土器(28)



底面自然孔(8)



左・底面板状圧痕(12) 右・口縁タール付着(12)



底面ヘラ記号(27)

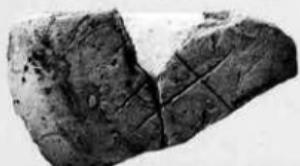


底面回転条切り痕(43)



(1:2)

底面ヘラ記号(18)



底面ヘラ記号(19)

報告書抄録

書名	沖ノ羽遺跡 I (A地区)							
副書名	磐越自動車道関係発掘調査報告書							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第58集							
著者名	石川智紀・星野信明・木村康裕・佐藤正知・高橋保雄・龟井 功							
編集機関	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒951 新潟県新潟市一番堀通町5923-46 TEL. 025-223-5642							
発行年月日	西暦 1994年3月30日							
所取遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	道路番号					
沖ノ羽遺跡	新潟県新潟市大字七日町 字沖ノ羽3255他	15-207	14	37度48分55秒	139度06分00秒	第一次調査 19900412-19900413 19900514-19900524 19900530-19900602 19900618-19900630 第二次調査 19910415-19911219 19920409-19921210	2,048 42,853	道路（磐越自動車道いわき一新潟線）の建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
沖ノ羽遺跡	生産遺跡	平安時代 9世紀後半 ~10世紀	溝42条 土坑3基 性格不明遺構5基	土師器・須恵器10箱 珠洲焼 転用研削具				

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第58集

磐越自動車道関係発掘調査報告書

おきのは
沖ノ羽遺跡 I (A地区)平成6年3月10日印刷
平成6年3月30日発行

新潟県教育委員会

財団法人新潟県埋蔵文化財

調査事業団

〒951 新潟市一番堀通町5923-46

電話 (025) 223-5642

FAX (025) 228-1762

印刷 長谷川印刷

新潟市小針1-11-8

電話 (025) 233-0321

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第58集『沖ノ羽遺跡Ⅰ(A地区)』 正誤表追加

頁	位置	誤	正
抄錄	遺跡番号	1 4	2 6
抄錄	東経	1 3 9 度 8 分 0 秒	1 3 9 度 8 分 1 2 秒